

---

日本ラテンアメリカ学会 第36回定期大会

# 報告要旨

---

2015年5月30日(土)～5月31日(日)

専修大学(生田キャンパス)

# 日本ラテンアメリカ学会 第36回定期大会 プログラム

2015年5月30日(土)・31日(日)

専修大学 生田キャンパス

受付 .....	10号館2階(エスカレーター前, 9:30~)
分科会・パネル .....	10号館2階(10205、10206、10213、 10214、10215教室)
記念講演・総会・シンポジウム .....	10号館2階(10203教室)
出版社ブース .....	10号館2階(10202教室前通路)
食事・休憩・お弁当引き渡し(31日) .....	10号館2階(10202教室)
理事会 .....	10号館5階(ゼミ105T教室)
懇親会 .....	10号館4階(食堂)
大会実行委員会本部 .....	10号館2階(10204教室)

5月30日(土) 分科会(午前) 10:00~12:00/12:30

● 分科会1 政治学 【10号館2階10205教室】(10:00~12:00)

司会 内田みどり(和歌山大学)

- 磯田沙織(筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程)

「ペルー政治におけるポスト「代表制の危機」に関する一考察」

【討論】岸川毅(上智大学)

- 吉野達也(大阪経済大学非常勤講師)

「メキシコの地方からの民主化 —ハリスコ州、国民行動党(PAN)の事例—」

【討論】箕輪茂(上智大学グローバル教育センター 特別研究員)

- 松本八重子(亜細亜大学)

「ガイアナの政治制度の変遷 —ウェストミンスター・システムから大統領制へ—」

【討論】岸川毅(上智大学)

● 分科会2 経済学① 【10号館2階10206教室】(10:00~12:00)

司会 藤井礼奈(上智大学大学院博士後期課程)

- 河合沙織(龍谷大学)

「ブラジルにおける中央・州財政運営と地域経済」

【討論】山崎圭一(横浜国立大学)

- 藤井嘉祥(専修大学非常勤講師)

「グアテマラの輸出加工業における社会的高度化の現状」

【討論】小池洋一(立命館大学)

- 大木雅志(外務省在グアテマラ日本国大使館 専門調査員)

「グアテマラにおける中国のプレゼンスの拡大」

【討論】藤井嘉祥(専修大学非常勤講師)

● 分科会3 先スペイン期社会 【10号館2階10213教室】(10:00~12:30)

司会 福原弘識(埼玉大学教育機構)

- 岩崎賢(茨城大学)

「アステカ人の供犠における血のシンボリズム」

【討論】 杓谷茂樹（中部大学）

- 小林致広（神戸市外国語大学名誉教授）

「征服地域から見たアステカ貢納システム—トラパ貢納地区に関するフンボルト  
絵文書断片 1 / アソユー絵文書 2 裏面の分析から」

【討論】 井関睦美（明治大学）

- 植村まどか（京都外国語大学）

「先コロンブス期中米南部における祭祀メタテの機能に関する考察」

【討論】 長谷川悦夫（埼玉大学教育機構）

- 坂井正人（山形大学人文学部）

「ナスカ台地の地上絵と景観構造」

【討論】 渡部森哉（南山大学）

#### ● 分科会 4 文化人類学①

【10号館 2階 10214 教室】(10:00～12:00)

司会 本谷裕子（慶應義塾大学）

- 大倉由布子（メキシコ国立自治大学文哲学部大学院メソアメリカ学専攻博士後期課程）

「商標「マヤ」：ユカタン州バヤドリッドを事例に」

【討論】 禪野美帆（関西学院大学）

- 河邊真次（愛知県立大学非常勤講師）

「観光資源として演出されるカトリック聖地—ペルー北部ピウラ県の 2 つの巡礼  
地を事例として—」

【討論】 丸岡泰（石巻専修大学）

- 桜井三枝子（南山大学ラテンアメリカ研究センター客員研究員）

「ホンジュラスの女性参政権とフェミニズム運動の歩み」

【討論】 北條ゆかり（摂南大学）

5月30日（土） 11:30～13:20

#### ■ 理事会

【10号館 5階ゼミ 105T 教室】

5月30日(土) 分科会・パネル(午後) 13:30/14:00~16:00

● 分科会 5 文学・メディア 【10号館2階10205教室】(14:00~16:00)

司会 後藤雄介(早稲田大学)

○ 長谷川ニナ(上智大学)

“La corrupción de las élites y la censura en las obras de teatro del impresor popular Vanegas Arroyo”

[討論] 柳原孝敦(東京大学)

○ 高山パトリシア(早稲田大学助手)

“Estrategias de expansión de las telenovelas latinoamericanas”

[討論] 林みどり(立教大学)

○ 野内遊(名古屋大学非常勤講師)

「ナルコテレノベラの特徴 —テレムンド作品を中心に—」

[討論] マウロ・ネーヴェス(上智大学)

● 分科会 6 現代社会とヒト 【10号館2階10206教室】(14:00~16:00)

司会 牛田千鶴(南山大学)

○ 近藤宏(国立民族学博物館)

「企業と先住民共同体——パナマ東部先住民エンベラに見る集合性の形式」

[討論] 新木秀和(神奈川大学)

○ 大津若果(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻, 研究生)

「メキシコの機能主義——ルイス・バラガンとファン・オゴルマンを事例として」

[討論] 山崎眞次(早稲田大学)

○ 山本昭代

「組織犯罪の人類学——親族から読む解くメキシコ麻薬カルテル」

[討論] 受田宏之(東京大学)

● 分科会 7 歴史学

【10号館2階10213教室】(13:30～16:00)

司会 柳沼孝一郎 (神田外語大学)

- 長尾直洋 (東洋大学人間科学総合研究所客員研究員)

「サンパウロ人文科学研究所所蔵の楡木久一資料に関する調査報告」

【討論】 住田育法 (京都外国語大学)

- 和田杏子 (青山学院大学大学院)

「ヌエバ・エスパーニャにおけるインディオ村落共同体の変容についての俯瞰的考察」

【討論】 横山和加子 (慶應義塾大学)

- 立岩礼子 (京都外国語大学)

「メキシコ市における防衛と祝祭の関連性 ―聖イポリト祭から―」

【討論】 武田和久 (早稲田大学高等研究所)

- 川上英 (東京大学等非常勤講師)

「チューインガムとメキシコ革命：革命政府によるチクル産業「国有化」の試み」

【討論】 ロメロ・イサミ (帯広畜産大学)

◆ パネル A 現代メソアメリカ社会における古代遺跡の保存と活用―文化資源の管理をめぐる学際的パースペクティブ

【10号館2階10214教室】(13:30～16:00)

代表者 小林貴徳 (関西外国語大学)

- ◇ 福原弘識 (埼玉大学教育機構)

「考古学者は古代遺跡をどのように資源化するか―国家的モニュメントとしてのテオティワカン―」

- ◇ 市川彰 (名古屋大学高等研究院)

「遺跡を語り、活用し始めた人々 ―エルサルバドルにおけるコミュニティ考古学の実践例からみる古代遺跡の資源化のプロセス―」

- ◇ 杓谷茂樹 (中部大学)

「観光業界、行政、そして地元住民 – ステークホルダーのそれぞれの思惑が交  
叉する世界遺産チチェン・イツァの現実」

◇ 小林貴徳（関西外国語大学）

「遺跡の地域資源化と文化景観の生成 – メキシコの観光開発プログラム「プエブ  
ロス・マヒコス」における地域社会の取り組み」

【討論】 本谷裕子（慶應義塾大学）、鈴木紀（国立民族学博物館）

#### ◆ パネル B 実行委員会特別企画

Proceso de paz en Colombia: situación actual, alcance y retos pendientes

【10号館2階10215教室】(13:30~16:00)

代表者 幡谷則子（上智大学）

◇ 幡谷則子（上智大学）

“Introducción: el objeto del panel y los antecedentes del tema”

◇ Carlo Nasi（Universidad de los Andes）

“Las negociaciones de paz de La Habana, balance y perspectivas”

◇ 二村久則（名古屋大学）

“Las fases de las relaciones bilaterales entre Colombia y los EE.UU. en torno al  
proceso de paz”

◇ 千代勇一（上智大学イベロアメリカ研究所）

“El impacto social de los procesos de paz: la reinserción e integración de los  
ex-actores armados”

【討論】 田中高（中部大学）、細谷広美（成蹊大学）

5月30日(土) 16:15~17:15

■ 記念講演

【10号館2階10203教室】

Dr. Federico Navarrete Linares (Instituto de Investigaciones Históricas,  
Universidad Nacional Autónoma de México)

“La historia de los pueblos indígenas de América en el marco de la historia global”

\* 記念講演はスペイン語で行われます(通訳なし)。

5月30日(土) 17:20~18:20

■ 総会

【10号館2階10203教室】

5月30日(土) 18:30~20:30

■ 懇親会

【10号館4階(食堂)】

\* 受付前エスカレーターから4階へ移動願います。

5月31日(日) 分科会・パネル 10:00~12:00/12:30

● 分科会8 経済学②

【10号館2階10205教室】(10:00~12:00)

司会 三澤健宏(津田塾大学)

- Jorge Alberto López Arévalo (Universidad Autónoma de Chiapas), Emmanuel Arrazola Ovando (Universidad del Mar, Huatulco)

“El TLCAN: un balance de dos décadas (1994-2013)”

[討論] 安原毅(南山大学)

- Francisco García Fernández (Universidad Autónoma de Tamaulipas)

“Modelo de desarrollo y los retos de las reformas estructurales en México. Caso del sector agrario”

[討論] 谷洋之(上智大学)



● 分科会 9 文化人類学②

【10号館2階10206教室】(10:00～12:00)

司会 梅崎かほり (神奈川県立大学)

- 藤掛洋子 (横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院)

「パラグアイにおけるグアラニー文化と表象」

[討論] 藤田護 (東京大学)

- 武田優子 (早稲田大学)

「Shall we タンゴ?—現代ブエノスアイレスのミロンガにおける生の演戯性」

[討論] 石橋純 (東京大学)

- 田中理恵子 (東京大学大学院総合文化研究科博士課程)

「現代キューバにおけるクラシック音楽の社会的布置をめぐって」

[討論] 森口舞 (慶応義塾大学法学部非常勤講師)

◆ パネル C Viejos y nuevos enfoques en el estudio de las relaciones exteriores de América Latina

【10号館2階10213教室】(10:00～12:30)

代表者 ロメロ・イサミ (帯広畜産大学)

- ◇ Edgar Peláez (早稲田大学)

“Análisis del poder blando de Japón: “Cool Japan” y la influencia de la cultura popular japonesa en México”

- ◇ Mariana Quintana (一橋大学)

“La diáspora mexicana como herramienta de la diplomacia pública de México”

- ◇ Isami Romero (帯広畜産大学)

“Japón y el gobierno revolucionario cubano durante la primera mitad de la década de 1960”

- ◇ 上英明 (オハイオ州立大学)

“A New Look at U.S.-Cuban Relations: Migration Talks, Propaganda War, and Persistent Animosity after the Cold War”

[討論] 小池康弘 (愛知県立大学)

◆ **パネル D 実行委員会特別企画**

詩の翻訳可能性と受容について —ボルヘスの「十七の俳句」をめぐって—

【10号館2階10214教室】(10:00～12:30)

代表者 野谷文昭 (名古屋外国語大学)

司会 鬼塚哲郎 (京都産業大学)

◇ José Amícola (Universidad de La Plata)

“*Diecisiete haiku de Borges*”

◇ 井尻香代子 (京都産業大学)

「アルゼンチンにおける日本の詩歌の受容」

◇ 内田兆史 (明治大学)

「ボルヘスの詩作品を訳す —ボルヘス会による月例「読詩会」での取り組み」

◇ 野谷文昭 (名古屋外国語大学)

「詩の変容 —ボルヘスのハイクから日本の俳句へ」

[討論] 太田靖子 (京都外国語大学)、真下祐一 (駒澤大学)

◆ **パネル E イエズス会宣教を通じてのエリート現地民の誕生と社会・宗教組織の形態—  
アジアとラテンアメリカの比較に向けて—**

【10号館2階10215教室】(10:00～12:30)

代表者 武田和久 (早稲田大学高等研究所)

◇ 武田和久 (早稲田大学高等研究所)

「信心会研究に関する若干の考察—グローバルな視点—」

◇ Guillermo Wilde (Universidad Nacional de San Martín / 国立民族学博物館)

“*Identidad religiosa, memoria social y persona en las misiones jesuíticas de Sudamérica: congregaciones religiosas guaraníes y chiquitanias en los siglos XVII y XVIII*”

◇ 川村信三 (上智大学文学部)

「16 世紀日本布教地における慈善型「兄弟会」の機能と発展—葬儀、病院、代替教区—」

◇ Carla Tronu Montané (Japan Research Centre, SOAS, University of London)

“La relación entre las cofradías y las parroquias de Nagasaki en el siglo XVII”

[討論] 桜井三枝子 (南山大学ラテンアメリカ研究センター客員研究員)

5 月 31 日 (日) 13:45~16:15

■ シンポジウム “Desarrollo Inclusivo en América Latina”

【10 号館 2 階 10203 教室】

Coordinador: Tomomi Kozaki (専修大学)

□ Panelistas

◇ Naoko Uchiyama (日本学術振興会・特別研究員/神戸大学)

“Concepto y análisis económico del desarrollo inclusivo”

◇ Manuel Edgardo Lemus (Asesor, Sistema de Integración Centroamericana)

“Lineamiento del SICA sobre el desarrollo inclusivo en Centroamérica y la República Dominicana – con énfasis en la seguridad ciudadana”

◇ Héctor Salazar (Gerente del Sector Social, Banco Interamericano de Desarrollo)

“Desigualdades y el desarrollo inclusivo: políticas sociales del BID”

◇ Kazuo Fujishiro (Director de Centroamérica y Caribe, JICA)

“Nueva ruralidad y el desarrollo inclusivo: lineamiento de JICA”

◇ César Cabello (Instituto Desarrollo, Paraguay)

“Modelo del análisis causal para el desarrollo inclusivo territorial”

□ Comentarista: Yoshiaki Hisamatsu (東洋大学)

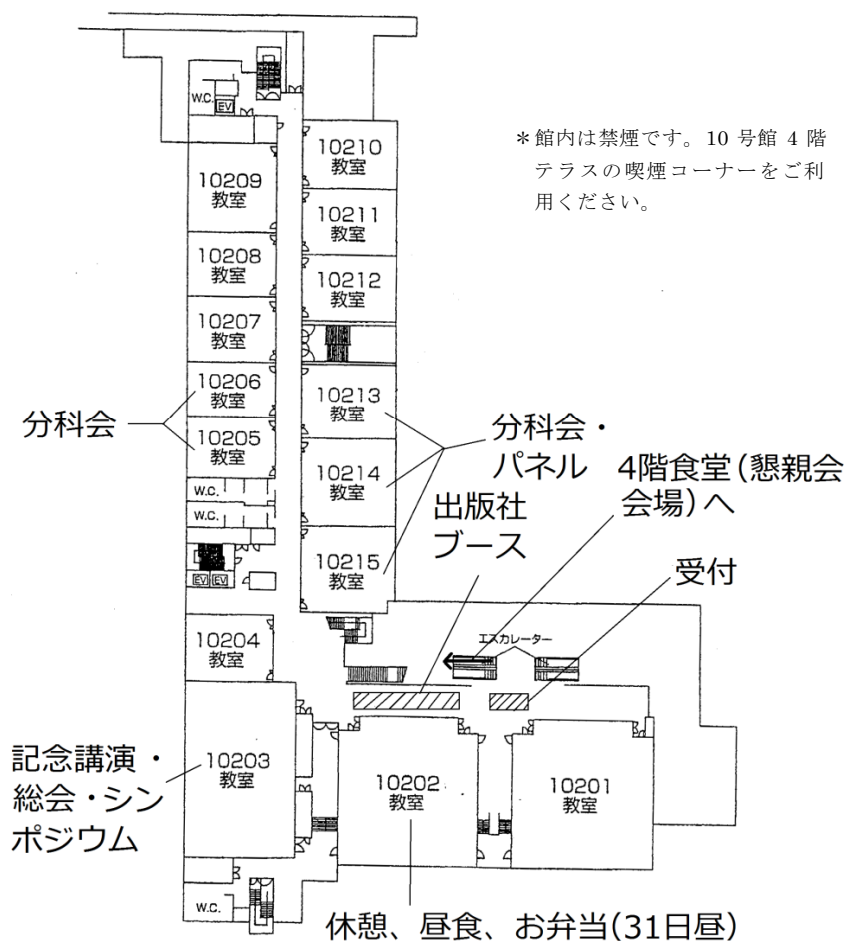
\* シンポジウムはスペイン語で行われます (通訳なし)。

発表会場（教室）一覧表

\*いずれも10号館2階

	10203 教室	10205 教室	10206 教室	10213 教室	10214 教室	10215 教室
30 日午前 (分科会)		政治学 10:00～12:00	経済学① 10:00～12:00	先スペイン期社会 10:00～12:30	文化人類学① 10:00～12:00	
30 日午後 (分科会 パネル)		文学・メディア 14:00～16:00	現代社会とヒト 14:00～16:00	歴史学 13:30～16:00	パネル A 13:30～16:00	パネル B 13:30～16:00
30 日夕方	記念講演 16:15～17:15 総会 17:20～18:20					
31 日午前 (分科会 パネル)		経済学② 10:00～12:00	文化人類学② 10:00～12:00	パネル C 10:00～12:30	パネル D 10:00～12:00	パネル E 10:00～12:30
31 日午後	シンポジウム 13:45～16:15					

専修大学 生田キャンパス 10号館2階案内図





# 分科会

掲載順

分科会 1～9

パネル A～E

記念講演

シンポジウム

## ペルー政治におけるポスト「代表制の危機」に関する一考察

磯田沙織(筑波大学大学院博士後期課程)

1990年代以降のペルー政治において、代表制が「危機に瀕している」と分析されたが、2000年のフジモリ政権の終焉を経て、代表制はどのような変遷をとげているのであろうか。本報告では上述した問題意識を踏まえ、政党システムが再構築されることなく代表制民主主義が継続されてきたペルー政治を分析対象とする。

代表制の「危機」に関する議論においては、代表制民主主義の根幹を支えていた政党システムの機能不全、街頭での抗議活動の増加等が観察された場合、代表制が「危機に瀕している」と指摘されてきた。他方、参加型予算の導入といった直接的な政治参加を制度化する動きも見られ、代表制の「危機」を補完する役割を果たし得るかといった議論も展開されてきた。

本報告で取り上げるペルーでは、2000年にフジモリ政権が終焉を迎えた後も、新しい政治アクターが次々と出現した後に勢力を低下させ、新しい政党の定着には至らず、政党システムの再構築は観察されなかった。他方、フジモリ政権終焉以降、市町村レベルにおける参加型予算の導入や住民組織の形成といった政治参加の制度化が進められ、政党を介さない形式での直接的な政治参加の仕組みが整備されつつある。しかし、上述した制度の導入から10年以上が経過した後も、こうした政治参加は様々な問題を抱えている。例えば参加型予算に関しては、各地区における予算編成の取り組みが異なり、住民組織に関しても、地区によって住民の低い参加意欲や既存の自治組織との対立が観察され、十分に機能しているとは言い難い。寧ろ、個別の法案や資源開発に対する抗議活動といった非制度的な政治参加が顕著に観察され、中には法案を廃止に追い込む程の影響力を及ぼした事例もみられた。

こうした事例を踏まえ、2000年以降のペルー政治において、制度的及び非制度的な政治参加が、ポスト「代表制の危機」にどのような影響を与えたのかについて考察する。

## メキシコの地方からの民主化 —ハリスコ州、国民行動党(PAN)の事例—

吉野達也(大阪経済大学)

2012年の制度的革命党(以下PRI)への政権交代以来、地方選挙における与党PRI候補の勝利数は増加する傾向にある。特に州知事においては2014年時点で31州の内、22州知事がPRIの出身者である。言い換えれば、約20年に渡って維持され続けた選挙競争は現在再び低く推移しつつある。メキシコでは、1980年代後半から民衆によるPRIの権威主義へのけん制がより顕著となり、またPRIも自ら脱中央集権化や選挙改革を積極的に取り組んだ。その結果、各州知事選挙においてもPRI、国民行動党(以下PAN)、革命民主党(PRD)を中心とした選挙競争が生じた。つまり2000年のPRIからPANへの政権交代以前から地方において民主化の波が多く見られた。現在、国家全体でPRIの一党優位が再び強まりつつある中、地方における選挙競争を考察するのは、メキシコにおける民主化の過程を把握する上でも重要な事項であると言える。

ハリスコ州は、人口規模、経済規模でメキシコ国家レベルにおいても重要な位置づけにある。したがってPRIによる一党優位が依然として強かった1995年、ハリスコ州知事選挙におけるPAN候補の勝利はPRIの弱体化を理解する上で重要な出来事のひとつであった。ハリスコ州におけるPANの先行研究は存在するものの、PANに所属する州知事達の政策内容などの事例研究は、十分に行われていないのが現状である。

本発表は主にハリスコ州の歴史的背景、経済状況などを取り上げながら前述の州知事がどのような政策を実行し、18年に渡ってPANから州知事が選ばれた背景を考察していきたい。PAN出身のカルデナス州知事(1995-2001年)が初めて野党候補として勝利し、その後も同じくPAN候補のラミレス州知事(2001-2007年)やゴンサレス州知事(2007-2013年)が続いた。歴史的背景を取り扱うに当たってはクリステーロの乱(1926-1929年)や、選挙競争がほぼ皆無であった1950年代に大統領選挙にPANから立候補したゴンサレス・ルナなどに触れ、元来ハリスコ州にはPANの主な支持層である敬虔なカトリック信者が多い点などを挙げたい。また経済状況に関しては、PANの政治家たちが、PRI体制の中で十分な経済的な恩恵を授かることが出来なかった資本家や、中間層にどのような公約を約束し、実行しようとしたのかを考察していきたい。



## ガイアナの政治制度の変遷 ——ウェストミンスター・システムから大統領制へ

松本八重子(亜細亜大学)

英連邦カリブ諸国の多くは脱植民地化過程において議院内閣制度を導入し、独立後もウェストミンスター型議会制民主主義を定着させてきた。本報告でとりあげるガイアナは例外的に大統領制度をとっており、どのようにして議院内閣制度から現在の大統領制度へと変化したのか、その概要を記述・論考することを本報告の目的としたい。政治制度の転換を促進した主たる要因として、冷戦構造というイデオロギー的要因と、アフリカ系とインド系が二大政党政治を展開するというエスニックな要因、この二つを指摘できる。人民進歩党(PPP)はインド系政党であり、農村部を支持基盤とし、他方、人民全国会議党(PNC)はアフリカ系政党であり、都市部に勢力を持つ。両者は労働運動と連動しながら発展し、独立前より、インド系人口がアフリカ系人口を凌ぐという関係が続いている。

分析対象とする時期は1950年代から2000年代までとし、①脱植民地化期、②バーナム政権期(権威主義期)、③民主化期、の三つに時期区分し論じる予定である。脱植民地化期においては、1964年に比例代表制が導入され、イギリス型選挙制度の特徴の一つである小選挙区制度を廃止している。この制度改革によりPNCを中心とする連立内閣が発足し、ソ連型社会主義に傾斜していたPPPを抑え込むことが可能となった。66年にガイアナは独立し、70年には立憲君主制から立憲共和制へ移行し、バーナム政権は協同共和国の形成を目標とするようになる。さらに80年には新憲法が公布され、行政型大統領制度(executive presidency)が導入され、バーナム大統領に国家の政治権力が集中するようになった。人口では不利なPNCが何故長期にわたり政権を維持することが可能となったのか、という視点からバーナム政権を論考していく。その際、選挙不正やパトロネージュ、軍部の関与などに着目する。さらに85年のバーナム大統領の急死以降を民主化期とし、PNCからPPPへの政権交替、PNC、PPPの新経済自由主義の受容、98年のカリコム仲介によるハードマンストーン合意、2000年の選挙制度改革、などについて言及する。PPP長期政権が続いており、どのようにしてエスニシティに基づく投票行動が変化し、民主主義的政権交代が実現するか、が課題とされてきた。

現行制度では、ガイアナの大統領は総選挙で勝利した第一党の大統領候補が通常就任する仕組みとなっており、アメリカやラテンアメリカの大統領選挙とは異なっている。このような議会と大統領の関係はイギリスの議院内閣制度に近く、比較政治学的視点も交えて考察していきたい。

## ブラジルにおける中央・州財政運営と地域経済

河合沙織(龍谷大学)

財政の一般的な役割としては、公共財の供給や所得の再分配を通じた市場の失敗の是正に加えて、経済の安定化がある。経済安定化を目指してカウンターサイクリカル (counter cyclical) な財政運営が行われた場合、景気後退期に財政出動や減税を行い、拡大期に歳出抑制や増税により借入金を返済する。しかしながら、ラテンアメリカをはじめとする途上国では、後退期に歳出を削減し、拡大期に歳出を増やすという、プロサイクリカル (pro cyclical) なパターンが見られることが、クロスカントリーデータを用いた近年の実証研究において指摘されてきた (Gavin et al. 1996, Kaminsky et al. 2004)。

こうした財政運営は経済のバブル化や不況の深刻化を招き、マクロ経済のボラティリティ (volatility) を増大させる。特に問題となるのは、マイナスのショック発生に伴うダメージが貧困層に蓄積される点である。すなわち景気順応的な財政スタンスはボラティリティの増大を通じて、貧困層に悪影響を及ぼす可能性が高い。貧困や格差問題は今なおブラジルにおける重要な政策課題であることを考えると、財政運営は直接的な再分配を伴う歳出政策のみならず、マクロ経済のボラティリティの観点からも、重要な意味を有している。

また、ブラジルは 1990 年代後半より財政改革に着手し、2000 年には財政責任法を施行するなど、赤字削減目標のもと、財政規律の回復に取り組んできた。制度の変更に伴い、中央政府ならびに地方 (州・ムニシピオ) 行政の財政運営にも変化が生じている。本稿では、中央・州政府の財政運営に着目し、財政のサイクリカルティへの影響を検討するとともに、こうした改革が財政運営ならびに地域経済にどのように影響してきたのかについても検討する。

## グアテマラの輸出加工業における社会的高度化の現状

藤井嘉祥(専修大学)

途上国における産業高度化は、単純組立からの脱却と産業クラスターの形成によるグローバルバリューチェーン(GVC)内での上昇だけでは評価できなくなっている。企業の社会的責任(CSR)と NGO による監視強化を受けて、労働者の権利保証による安定した労使関係に基づく国際的・国内的な信頼の獲得も重要な要素となっている。GVC 研究においても、労働条件の改善と労働者の厚生を社会的高度化として概念化し、産業高度化を労働者の状況を含めて分析する研究が出てきている。

本報告では、グアテマラのアパレル産業における労働者の権利の保証のための監視体制を、企業 - NGO 関係による民間監視と地域経済統合 - 労働組合 - 政府関係による公的監視の両面から検討し、CSR による監視体制の効果と限界を指摘し、労働者の地位向上における地域経済統合の意味を考察する。具体的には、CSR による工場査察と NGO の告発という民間監視と、グアテマラ政府の労働法の不履行に対して労組が米国・中米自由貿易協定(DR-CAFTA)の労働条項に対して申立てを行う地域経済統合レベルの公的圧力の 2 つプロセスを考察する。

企業の CSR と NGO の監視は、90 年代に多発した児童労働、最低賃金以下の雇用、不衛生な職場環境等の解消に寄与している。しかし、2005 年のアパレル貿易の自由化とコスト競争の激化により、労働条件を切り下げる「底辺への競争」に拍車がかかることが懸念されている。グアテマラでも給与未払い、社会保険料の未納、労働運動の押さえつけや運動関係者の違法な解雇といった問題が生じており、グアテマラに生産を委託するグローバル企業からも労働争議の解決要請がグアテマラ政府に対してなされている。

グアテマラは OEM、クラスター、労働者の生産性の点では中米で先進的であるものの、厳しい労働統制を敷いている。輸出加工業を代表する労組がないなかで、労働争議が多発すれば、生産性と品質を上げても、ブランド企業からの長期的な信頼を得ることができないだろう。また生産性や製品付加価値を高めるためには労働者のコミットメントも必要である。したがって、産業高度化の分析において労働者の地位向上を考慮することは意義のあることであろう。

## グアテマラにおける中国のプレゼンスの拡大

大木雅志(在グアテマラ日本国大使館)

昨今、グアテマラにおける中華人民共和国（以下、「中国」）のプレゼンスが拡大している。グアテマラは台湾と外交関係を結ぶ世界でも数少ない国のひとつであり、これまで両者は良好な関係を維持してきた。そのため、他のラテンアメリカ諸国と比較して、グアテマラにおける中国のプレゼンスは政治的にも経済的にも隠微な状態が続いてきた。

しかし、過去 5 年間（2009 年～2013 年）の中国からグアテマラへの輸入額は 2 倍以上、グアテマラから中国への輸出額は 4 倍以上に膨らんでおり、グアテマラにおける中国の経済的プレゼンスが増大しつつある。相対的にも、米国、メキシコ、エルサルバドルに次いで中国がグアテマラにとっての貿易相手国第 4 位（2013 年）となっている。また、2014 年 4 月、グアテマラ経済省は、香港におけるグアテマラ通商事務所の開設を決定し、同事務所を通じて、経済面だけでなく、観光や文化の面でも両国の交流を促進する旨発表した。さらに、同年 7 月には「グアテマラ・中国：短期・中期・長期的経済戦略（貿易及び投資）に向けて」フォーラムが、同年 9 月には中国通商エキスポ（いずれもグアテマラ政府後援）が開催されるなど、中国との経済交流が活発に行われている。

一方、政治的にも変化が起こりつつある。2014 年 3 月、資金洗浄容疑で米国に身柄を引き渡されたグアテマラのポルティージョ元大統領に対する裁判において、同大統領は過去に台湾との外交関係を維持するために台湾から賄略を受け取っていたことを認めた。また、同時期にグアテマラ外務省は、台湾「大使館」から毎年「金銭的支援」を受け取っていたことを明らかにした（同支援の受取は既に中止）。上記の経緯から、グアテマラにおける台湾に対する見方も厳しくなり、今こそ台湾と断交して中国と国交を樹立すべきとの世論が持ち上がった。

これに対し、ペレス・モリーナ現大統領は、中国との国交樹立及び同検討の可能性を否定したが、グアテマラ外務省は、中国との外交関係樹立の可能性を明確に否定してはおらず、2014 年 3 月、カレラ外相（当時）は、長期的には中国との関係を正常化していきたい旨コメントしており、中国との外交関係はないものの、今後は経済関係に加えて、文化交流も促進していきたいと述べている。このような中、2015 年 9 月に実施予定のグアテマラ大統領選及び総選挙において最有力候補とされる野党 LIDER は、国会において中国重視の言動を発している。

今後、経済面においては、グアテマラ政府による中国との関係強化により、グアテマラにおける中国の経済的プレゼンスはさらに拡大する可能性が高い。一方、政治面においても、2015 年の大統領選の結果次第では、グアテマラ側から中国に歩み寄る可能性がある。

## アステカ人の供犠における血のシンボリズム

岩崎賢(茨城大学)

本報告では、メソアメリカのアステカ人（メシーカ人）の宗教伝統の中心的要素である供犠（生贄の儀礼）における、血のシンボリズムについて発表する。アステカ人の宗教伝統の研究が本格化したのは、おおよそ二十世紀の中葉のことである。とくに歴史学者のA・カソの著作『太陽の民／*El pueblo del sol*』（1953年）の出版以来、「アステカ人は生贄の血を捧げることで太陽に活力を賦与しようとした」、とする考え方が一般に広まった。たしかにアステカ文明に関する歴史文献や考古学的遺物には、生贄の儀礼によって「神々に血を捧げる」という神話的テーマが数多く認められる。その意味で従来の研究において、この主題を中心にアステカ供犠論が展開してきたことは正当であった。ただし、この種の議論には、ある難しい解釈学的問題がはらまれている。それは、それらが《機械のアナロジー》に基づいてアステカ供犠を説明してきたことで、この宗教的行為のリアリティに接近することを難しくしてしまっているという問題である。

《機械のアナロジー》とは、つまり、アステカ人にとって「血液」はある種の「ガソリン」のような動力源であり、また「太陽」はそれによって作動する一種の「機械」のようなものであった、とする見方のことである。しかし結局のところ、「太陽」を機械とみなし「血液」を燃料とみなす世界観は、現代の科学的世界観とは相容れないものであるために、このアナロジーを用いる研究者らは最終的結論として、あるいは暗黙裡に、アステカ人を「迷信」「精神的逸脱」に陥った人々として片付けてしまうことになる。そこでは解釈者（現代の研究者）と解釈対象（古代のアステカ人）の異質性が固定化され、ほんらい解釈（理解）という行為において目指されていたもの、すなわち解釈者と解釈対象の距離（知的・精神的・感情的な疎隔）を克服するという目標が、頓挫しているように思われる。

《機械のアナロジー》の特徴は、供犠における「神々に血を捧げる」という主題を強調する点である。これに対して発表者は、以上の解釈学的問題を乗り越える手がかりとして、従来の研究では十分に注意が払われてこなかった「神々から血を頂く」という主題を示す事例に注目したい。この主題を示すものとして、本報告ではとくに十六世紀のスペイン征服前後に作成された「絵文書」の中のいくつかの図像を紹介しつつ、アステカ供犠を理解するための解釈枠組みとしての《大いなる生命体のアナロジー》を提示したいと思う。

## 征服地域から見たアステカ貢納システム —トラパ貢納地区に関するフンボルト絵文書断片 1 / アソユー絵文書 2 裏面の分析から

小林致広(神戸市外国語大学名誉教授)

従来のアステカの貢納システムに関する研究は、『貢納表』、『メンドサ絵文書第 2 部』、『モクテスマに納めていた貢納に関する 1554 年報告』という 3 つの基本資料の分析に基づいて構築されたものだった。いうまでもなく、これらは征服者メシーカ側の視点に立つ情報に依拠して植民地初頭に制作された資料である。一方、メシーカに貢納していた被征服者側の視点を反映した資料は極めて少ない。従来の研究においては、ドゥランの年代記の記述や 1580 年前後に作成された地誌的報告書に散見される記述が利用されてきたが、それらは断片的なものでしかなかった。こうしたなかで、『フンボルト絵文書断片 1』と『アソユー絵文書 2』にある貢納記録は、新しい分析視点を提供するきわめて有用な資料である。ふたつの資料は、本来は同一の資料だったもの (Gerardo Gutiérrez は『トラパ貢納記録 (Nómina de Tributos de Tlapa)』と命名) が分割され、一部は行方不明になった形で現在まで伝わっているものである。『トラパ貢納記録』には数年分の欠落はあるが、現ゲレロ州にあったトラパートラチノリャン領主国がメシーカに納めた黄金 (金粉と延べ棒) や木綿製衣服の量が、1487 年から 1522 年の 36 年間、年 4 回の貢納期ごとに具体的に記録されている。

『トラパ貢納記録』に関する Gerardo Gutiérrez の分析と仮説は要約すると、以下の 5 点にまとめられる。1) メシーカへの貢納品目の構成や量は、時代とともに変動する (トラパ地区の場合 9 度の変化)。2) 現地駐在のメシーカ収税官 (calpixqui) が収納する貢納品の構成や量は、メシーカ側の基本資料に記載されているものと必ずしも一致しない。3) メシーカの貢納要求に応えるため、特定の産品 (トラパ地区の場合は黄金) の生産が推進されることになる。4) 現地駐在のメシーカ収税官は、地元領主、地域商人、遠距離交易商人のネットワークを駆使して、メシーカ側の要求にある貢納品を調達する。5) 現地駐在のメシーカ収税官は、トラパ地区の貢納の 12% を必要経費として、自己留保していた。

本発表では、Gerardo Gutiérrez の分析と仮説のうち、基本資料におけるメシーカ設定のトラパ貢納区と『トラパ貢納記録』におけるトラパ地区を同一視できるか、貢納品目である金の延べ棒の貢納量の算定方法の妥当性、そしてメシーカ収税官の自己留保という問題などについて論及する。

## 先コロンブス期中米南部における祭祀メタテの機能に関する考察

植村まどか(京都外国語大学)

本発表では、中米南部（中間領域）に分布する先コロンブス期の祭祀メタテの機能について、コスタリカで実施した祭祀メタテの摩耗痕分析とコスタリカ国内での祭祀メタテの分布状況をもとに祭祀メタテの機能について考察する。

中間領域とは、中米と南米を結ぶ地峡部分にあたり、ホンジュラスからエルサルバドル、ニカラグア、コスタリカ、パナマ、コロンビア北西部までの 6 カ国から構成される。中米メソアメリカ文明と南米アンデス文明の中間に位置する中間領域は、メソアメリカ文明の威信財であったヒスイ製品と、アンデス文明の威信財であった金製品の双方が出土していることから、両文明との文化的交流を有していたと考えられるが、両文明との関係性は明らかにはなっていない。当該地域は、中米メソアメリカ文明と南米古代中央アンデス文明に関わる考古学研究者を多数輩出してきた日本においても盛んに研究されておらず、中間領域各国においても経済的理由や政治問題などから 20 世紀後半以降、考古学調査は積極的に行われてこなかったという研究の背景がある。

一方メタテとは、メソアメリカ地域において古代より日常的にトウモロコシやカカオなどの食物の製粉作業に使用されていた石皿のことである。中間領域では、日常的に用いられていたメタテの他に、優美な彫刻文様やジャガーやワシなどの動物形象などの装飾が施された祭祀メタテと呼ばれるメタテが確認されている。しかし、博物館に保管される祭祀メタテは一次資料ではないことから、考古学的研究対象として扱われず、祭祀メタテに関する研究は乏しいのが現状である。

本発表では、祭祀メタテが中間領域独自の文化により派生したものであると仮定し、祭祀メタテの機能が明らかになれば、先コロンブス期の中間領域の社会的背景や階層分化社会を考察する重要な資料となり得るとする仮説のもと、当該地域における祭祀メタテ研究の現状と課題を整理し、祭祀メタテが仮説の立証に相応しい資料であることを証明すること、さらにその機能について考察することを目的とした。

コスタリカの博物館で実見した 74 点の祭祀メタテから、①祭祀メタテの型式分類と摩耗痕の分類、②祭祀メタテの型式の分布と出土状況からの分析、③祭祀メタテと思われる土製品からの分析を行った。分析結果から、祭祀メタテにはイスとしての機能があったとの所見が得られた。メソアメリカ地域では王権（権力）の象徴として玉座がみられるが、イスとしての祭祀メタテとの比較から、先コロンブス期の中間領域の社会や階層化社会が考察できると考える。

## ナスカ台地の地上絵と景観構造

坂井正人(山形大学)

本発表では、ペルー共和国イカ県ナスカ市のナスカ台地に描かれた地上絵をめぐる景観構造とその動態を議論する。景観構造を明らかにすることによって、当時の人々が地上絵で何を行っていたのかを検討する。また景観構造の動態を明らかにすることによって、地上絵付近に成立した社会の動態を検討する。

地上絵は大きく分けて3つの種類がある。動物や植物などの生物図像の地上絵、台形・三角形・渦巻き文様などの幾何学図形の地上絵、小さな丘から放射状に広がる直線の地上絵である。これらの地上絵は、ナスカ台地の南北にある河谷の近くの台地上に比較的多く分布している。

ナスカ台地の景観に関する先行研究において、天体と山の存在が重要だと考えられた。そして直線の地上絵の方向は、天体の出没方向や山の方向を参考にして決められたと主張された。また動物の地上絵は当時の星座を示していると考えられた。

しかし、天体の出没方向もしくは山の方向と一致する直線の地上絵がごく一部にすぎないことが判明すると、ナスカ台地の景観における天体と山の重要性について疑問が呈された。また、星の間に想像上の補助線を引く星座とは異なるタイプの星座が、現代のアンデス地方では農耕や信仰の場面で用いられていることが明らかになると、動物の地上絵が星座であるという説も疑問視された。

本発表では、パラカス後期からイカ期までの約2000年間（前4世紀～後16世紀）にわたる地上絵（動物と直線）を分析の対象として、それぞれの時期に用いられた地上絵の分布と形態を分析する。それによって、ナスカ台地における地上絵をめぐる景観とその動態を検討するとともに、ナスカ台地の南北にある河谷に居住する人々が、地上絵で何を行っていたのかについて議論する。

本発表は、2010年よりナスカ台地において実施してきた現地調査によって把握した地上絵の分布状況、および地上絵付近で採取した土器の分析結果に基づいている。この土器の分析によって、それぞれの地上絵が使用された時期を想定することができた。またその結果を地上絵の分布状況と結びつけることによって、2000年間にわたる地上絵の利用状況とその変化を明らかにすることができた。これらの成果を積極的に活用して、本発表ではナスカ台地の地上絵をめぐる景観構造について論じる。



## 商標「マヤ」：ユカタン州バヤドリッドを事例に

大倉由布子(メキシコ国立大学大学院)

本発表は、メキシコはユカタン州東部に位置する、観光都市バヤドリッドに見られる「新しい」刺繍製品に着目したものである。この刺繍製品を通して、「マヤ」という言葉がどのような過程を経て、現代のユカタン文化の中に取り込まれているのか、そしてどのような意味・機能が刺繍製品に与えられているのかを明らかにしたい。

ユカタンに暮らす人々は、自身のことをインディヘナともマヤとも認識していない。彼らは自身をユカテコ/ユカテカ、もしくはどこの村の出身であるか、で表現する。または、*Maaya in t'aan o mayero* (マヤ語だけを話す者) や *K'áaxil máak* (山の者) と認識する。そして、インディヘナという言葉は、「貧困」を意味する。例えば、バヤドリッド近郊の村、ウスピビル (Uspibil) に暮らす一家は、「メキシコ政府が無償で私たちにテレビをくれるそうだ。素敵でしょ。だって、私たちは貧しいインディヘナだから。」と言っていた。彼らがインディヘナという言葉を使用するのは、こうした貧しさを引き合いに出す時のみである。また、マヤという言葉は、「先スペイン期の先祖」を意味する。バヤドリッド近郊にある村、ツイトゥヌップ (Dzitnup) に暮らす一家とセノテ・ケケン (K'ek'en) に足を運んだ時、息子の一人がユカタンの伝統的な台所を展示しているのを見て、「見て、ここにマヤの人々の台所があるよ。先スペイン期には、彼らはこういう台所を使っていたんだ。」と言った。現代でも同じような台所が使用されているにもかかわらずだ。

したがって、社会的カテゴリーと、彼らの自己認識は必ずしも一致するわけではない。しかし、バヤドリッドでは、あたかも「マヤ」が存在するかのように、至るところにマヤ・ユカテコ語の看板や、「マヤ」という言葉を使用した観光客向けの宣伝であふれている。こうした環境のもと、刺繍製品もまた、このイメージに対して重要な役割を果たしていることは明らかである。

さらに、近年では「新しい」刺繍として、アクセサリーが大量に出回っている。これらはユカタン女性の日常生活で使用されることはない。もはや、作り手はユカタン女性でありながら、そして刺繍製品は彼女たちの生活に密接にかかわっていたにもかかわらず、「新しい」刺繍は彼女たちの生活からはかけ離れている。こうした存在は、現代のユカタンでどのような意味・機能を持っているのだろうか。本発表では、ロトマン (Lotman) の理論を用いて、これを分析していく。

## 観光資源として演出されるカトリック聖地—ペルー北部ピウラ県の 2 つの巡礼地を事例として—

河邊真次(愛知県立大学)

ペルー北部ピウラ県には、国内外から多くの巡礼者が訪れる二つのカトリック聖地が存在する。ひとつは西部の港町パイタ (Paita) であり、巡礼対象は「慈悲の聖母 (Virgen de las Mercedes)」像である。この聖母の崇敬のために、毎年 1 ヶ月以上に及ぶ祝祭期間 (主日は 9 月 24 日) が設定され、教会を中心に数多くの催事が挙行される。他方、山岳地方に位置するアヤバカ (Ayabaca) には、巡礼対象として「囚われの主 (Señor Cautivo)」像があり、祝祭日 (10 月 13 日) 前後には 10 万人以上の巡礼者がこの地を訪れる。

植民地期以降、海上交易の拠点として発展し、風光明媚な避寒地として多くの観光客を惹きつけるパイタでは、2006 年以降、行政当局の協力の下、信徒組織が世俗的イベントを盛り込んだ盛大な祝祭を企画しており、行政もこの祝祭を宗教観光の中核に位置づけている。他方、アヤバカはアクセスの困難な山中にあり、巡礼の時期を除き、外部からの訪問者は多くない。「囚われの主」像は当地に出現して以来、地域住民のアイデンティティの源泉となってきたが、2013 年 10 月にその祝祭が国の無形文化遺産に指定されたことにより、巡礼者のみならず多くの観光客を誘引する観光資源としても期待されるようになった。しかし、社会基盤の整備の遅れが指摘されており、今後の対応に注目が集まっている。

文化人類学において観光現象とそれに付随するホストとゲストの間の相互作用に関する研究は 1970 年代以降、主要テーマのひとつとなってきた。その中で、文化の商品化、「伝統」文化の破壊と創造、あるいはホスト社会のアイデンティティの再構築といった点が議論されてきた。また、宗教学からも「宗教ツーリズム」という概念の下に、宗教を主動機とした観光現象が論じられ、文化遺産指定という世俗的な付加価値が加わることで、宗教的实践である巡礼が急速に観光商品化される動きに関心が寄せられている。他方、ペルーの宗教的巡礼に関する従来の研究は、土着の山岳信仰に根ざした山の神 (Apu) 巡礼にほぼ焦点化されてきた。ただしその場合、観光の現場で頻繁に見られるホストとゲストとの相互作用は生じにくく、それゆえ、観光という文脈からの議論は必ずしも多くはない。

本報告では、一方ではすでに観光イベントとして確立された感のあるパイタの「慈悲の聖母」巡礼と、観光開発が今後本格化すると思われるアヤバカの「囚われの主」巡礼を対比し、両聖地において巡礼と観光との接合面で展開される社会文化的動態を、主にホスト側の信徒組織および行政の諸活動から分析するとともに、宗教ツーリズムとしての聖地巡礼の社会文化的意味について考察する。

## ホンジュラスの女性参政権とフェミニズム運動の歩み

桜井三枝子(南山大学)

ホンジュラスの歴史はアメリカ人によるカリブ海沿岸地方のバナナ・プランテーション栽培と密接に結びつき、20 世紀初頭から第二次世界大戦終了まで世界最大のバナナ輸出国であった。米国資本は国家の根幹施設を掌握し金融機関を支配し、国内各地に軍基地を設営しホンジュラス政府と癒着し現在に至っている。1982 年に軍事政権から民政移管が行われ、近年まで自由党と国民党の二大政党制度が定着していた。

国連の人間開発指数では 129 位 (2013 年) で、国民総生産額は 3,574 米ドルで最貧国である。このような国情にありながら、ホンジュラス議会に占める女性議員の割合は、26% で世界順位では 50 位 (日本は 134 位) で、最新選挙年月 (2013 年) で閣僚に占める女性の割合は 17.6% で世界順位は 48 位である。本発表では、このような社会的背景における女性運動のプロセスを調べ、他のラテンアメリカ諸国の女性運動と比較するための第一歩としたい。

### 1. 女性参政権獲得へのプロセス

植民地時代に女性は学問の世界から排除され、貞潔、誠実、謙虚などの美德を躰けられ、教育は男子専科であったが、独立後の混乱期を経てホンジュラス国立自治大学長トリニダ・レジェスにより、理念上は女性にも教育が重要であるとされた。本格的な国家の近代化は 19 世紀後半の自由派アウレリオ・ソト大統領時代に進展し、自由主義憲法が制定されたが、女性には選挙権は与えられなかった。1927 年に小学校教諭にして作家のビシタシオン・パディジャ他 18 人が「女性文化協会」を設立し 25 団体約 6 千人の団員を抱える文化活動を展開した。こうした動きを背景に女性参政権要求運動が行われ、1955 年に女性の参政権が国会で満場一致で承認された。

### 2. 農村部と都市部の女性運動組織

都市部で高等教育を受けた女性たちが、参政権運動からフェミニズム運動へと活動を進める一方で、農村部では 1975 年代にカトリック教会が主婦クラブを立ち上げ、その運動からホンジュラス農民女性連合が結成された。農村部の多産と貧困のスパイラルから這い上がるのは至難の業であったが、家族計画委員会による活動が次第に農村部にも浸透した。女性運動の組織化を概観する。最後に、20 世紀末から 21 世紀初頭の女性たちに着目し、マキーラで働く女性たち、女性に対する家庭内暴力や組織暴力などについて言及し、可能であれば隣国グアテマラと比較を試みたい。

**La corrupción de las élites y la censura en las obras de teatro  
del impresor popular Vanegas Arroyo**

Nina HASEGAWA (Universidad Sophia)

Podemos dividir en 3 grupos las más de 42 obras de teatro (por lo general anónimas) publicadas por Vanegas Arroyo a lo largo de su vida de impresor en tiempos del Porfiriato. Las hay con un acentuado sabor popular mexicano, las que hablan directamente de la censura o de la corrupción de las élites y, finalmente, las que se inspiran en la zarzuela, un género musical escénico nacido en España pero muy de moda en todo el mundo hispánico durante el siglo XIX.

Aquí enfocaremos, únicamente, 3 obras: dos que hablan de la corrupción de las élites (*El juzgado de paz* y *El consultorio Médico*) y otra que habla de la censura (*Perico el Incorregible*). Las dos primeras son muy valiosas porque tienen muchos parecidos y nos dan argumentos sólidos para pensar que un mismo autor las escribió. Eso nos lleva a pensar que trabajaron para Vanegas Arroyo diferentes autores con características estilísticas y sensibilidades muy diferentes. Es importante ir identificando, por medio del análisis, las peculiaridades de cada autor para llegar a saber finalmente cuántos pudieron haber sido los colaboradores de esta casa editorial. A ese ejercicio nos abocaremos esta vez a la par que examinaremos de cerca cómo se formularon, en el escenario popular, las críticas del pueblo hacia el gobierno.

## Estrategias de expansión de las telenovelas latinoamericanas

高山パトリシア(早稲田大学)

En la mayoría de los países en desarrollo el mayor porcentaje de las exportaciones está representado por la venta de materias primas. En el caso de los países latinoamericanos las exportaciones están estrechamente ligadas al sector agrícola. Sin embargo en las recientes décadas, un nuevo producto, desarrollado en la región y no relacionado con el sector de las materias primas, se ha extendido rápidamente y exitosamente en los diferentes mercados mundiales: las llamadas *telenovelas*. Las *telenovelas* se definen como series melodramáticas que consisten en 100 a 150 capítulos televisados diariamente en episodios de una hora de duración aproximadamente, basándose por lo general en temas universales y cotidianos.

Estas *telenovelas* han tenido un importante rol dentro de la industria de medios en Latinoamérica. Como resultado de la exitosa expansión de este producto dentro de los distintos mercados globales, la industria en su conjunto, pudo desarrollarse no sólo en tamaño sino que también en calidad de producciones. Si bien ha habido un diferente grado en el desarrollo de las industrias de medios de acuerdo a cada país, el mismo *patrón de exportación* ha sido aplicado por casi todos los países de la región. Lo interesante de este modelo de exportación es que viene a contradecir aquellos argumentos que enfatizan la importancia de la *similitud cultural* como determinante de *estrategias de entrada a mercados* extranjeros (Bilkey y Tesar 1977, Hadjikhani 1997). El caso de un producto cultural como lo es el de las telenovelas, es un claro ejemplo de que aún existe lugar para lo inesperado en cuanto a lo que se refiere a *estrategias de internacionalización*.

La presente ponencia tratará sobre la expansión de las telenovelas, el modelo de exportación aplicado por las mismas así como también las posibles causas de éxito en los distintos mercados globales.

## ナルコテレノベラの特徴-テレムンド作品を中心に

野内遊(名古屋大学)

ナルコトラフィカンテ（麻薬密輸業者）を主要な登場人物とするナルコテレノベラは、2000年代半ばに登場し、その後も継続的にアメリカ合衆国及びコロンビアで制作されている。本発表は、そのナルコテレノベラの特徴をとらえようというものである。

テレノベラに関する先行研究を踏まえると、テレノベラの特徴をとらえるためには、2つの視点が必要であると考えられる。1つは、「大衆文化」としてのテレノベラへの視点である。もう1つは産業としてのテレノベラの視点である。研究者の問題意識やアプローチの仕方によって重点を置く場所は変わってくるが、この2つの視点はテレノベラをより深く考察するために必要なものといえる。

ミゲル・A・カバーニャ(Miguel A.Cabaña)は、“Narcotelenovelas, Gender, and Globalization in *Sin tetas no hay paraíso*”(2012)において、伝統的ともいえるテレノベラ研究における視点をもとにナルコテレノベラ *Sin tetas no hay paraíso*(2006)についての考察をおこなっている。グローバリズム、とくに新自由主義経済政策がラテンアメリカ社会に与えた影響を物語の中に見いだしている。他方、1つの作品に焦点、とくに内容の分析に焦点を当てているため、「大衆文化」そして産業としてのナルコテレノベラをとりまく環境に関する包括的な分析は限定的である。本発表では、カバーニャの議論を踏まえた上で、より包括的にナルコテレノベラについての考察をおこなう。主にマイアミに拠点を置いているテレムンドで制作、放映された作品に焦点を当てる。

## 企業と先住民共同体 ——パナマ東部先住民エンベラに見る集合性の形式

近藤宏(国立民族学博物館)

本報告では、パナマ東部先住民エンベラのもとで近年みられる企業化の動向について報告する。1983年にひとつの行政区として制定されたエンベラ=ウオウナン特別区(Comarca Emberá=Wounaan)のもとでは、2000年代中ごろから先住民の自治のひとつの方策として企業設立が進められるようになってきた。現在では、単一集落のもの、複数集落にまたがるもの、また特別区レベルのものなど複数の企業体が設立されており、またいくつかの計画が立ち上がっている。

特別区制定以前、エンベラのもとでは、親族関係を超越するような規模の政治体はなかった。現在では43の集落が属する特別区の制定は、従来の生活には見られない規模の集合体にエンベラを組織化するものでもあった。以降、特別区を運営する評議会は、先住民による自主管理を担う機構としての役割を担う。パナマ政府や国際的な機構が実施しようとするさまざまな開発計画等も、評議会との折衝のもとに進められることになっている。特別区内における企業の設立も、エンベラの単独の計画ではなく、国際機構からの助力とともに進められたものだった。

これらの企業は森林伐採を主たる施業とする。最も古いものは2005年から施業を始めている。この企業は同一河川流域に位置する5つの集落を母体とし、その流域の森林資源の持続可能な利用に向けて25年周期での伐採サイクルを立てている。これ以降の森林伐採を主たる施業とする企業は、ひとつの集落を母体とすることが多い。

この他に、各集落よりも特別区の政治体である評議会との結びつきがより強いものとして理解されている企業がもう一つある。この企業は、集落を母体とする企業のように特別区の領土内資源を直接的に利用するというよりも、コンサルタント等を進めるようになっている。

以上の企業はそれぞれ独立している。つまり、複数の集落をひとつに統合するような集合性を構築する特別区という制度を通じて、再び、その集合性を複数に分岐するようにして企業化の動向が生じている。

本報告ではこうした現状を概観した後、多数ある企業のうち一つに具体的に焦点をあて、特別区内のある地域における企業設立を通して、どのようにさまざまな社会的機構の関係性が人びとに想像されるようになっているのかを検討したい。

## メキシコの機能主義 ——ルイス・バラガンとファン・オゴルマンを事例として 大津若果(東京大学大学院)

本研究報告は、同時代のルイス・バラガン (Luis Barragán, 1902-88) とファン・オゴルマン (Juan O'Gorman, 1905-82) の作品を順に追いつつ、また、世界大戦でメキシコに移住した同時代の西洋近代建築家達を比較検討することによって、メキシコにおける機能主義がいわばその対概念とも言える地域主義に移り移られる過程について、メキシコの社会背景に注視して、明らかにするものである。このような地域主義やリージョナリズムの批判性は、主流／傍流、強者／弱者、中心／周縁という相対的な力関係において、いずれも後者の立場を表明する際に機能するために、モダニズムの多くの問題点が明らかになる。本報告では、地域主義やリージョナリズムという動向については、戦後建築における一潮流という定義だけではなく、20 世紀初頭のモダニズムや国際様式の完成の時点から、さまざまな建築家の内面で問われ続けてきたということ仮説としたい。

20 世紀初頭に西洋で展開された近代建築は、海を越えて各国に行き渡った。例えば、アメリカ大陸のメキシコの場合、アメリカ合衆国で 1932 年にニューヨーク近代美術館で「近代建築国際展」が開かれ、『インターナショナル・スタイル』が出版されるよりも前の 1929 年に、建築家ファン・オゴルマンによる〈セシル・オゴルマン邸〉が設計され、西洋で展開された近代建築が導入された。「機能主義 "funcionalismo" 」と呼ばれ、オゴルマンやファン・レガレッタを含む 20 代のサン・カルロス・アカデミー (メキシコシティ) の出身者達に試みられた。当時のメキシコに、西洋の近代建築をヨーロッパ大陸で直裁に学び、教授する指導者は存在しなかった。ただ本や新聞、雑誌等の図版によってのみ、ル・コルビュジェをはじめとする西洋の近代建築が学ばれた。

しかしながら、1950 年代になると、機能主義とともに、インターナショナル・スタイルがメキシコ国内に知られるなかで、〈大学都市〉(1949-52) の建設からもわかるように、インターナショナル・スタイルをめぐる対立が、建築意匠に示されるようになった。メキシコ原産の材料を建物本体の主に表面に用いるというその意匠は、機能主義の創始者である当のオゴルマン等にむしろ、試みられた。さらに、後半期のオゴルマンは、自らの建築家としての唯一の意図は、ペドレガル溶岩地帯の洞窟の〈オゴルマン自邸〉(1949-50) の建設にあったという確信を倦むことなく繰り返し述べた。本報告の考察の中心の一つである。

時系列に沿って、本報告では、まず、1920 年代から 1930 年代のメキシコに機能主義建築が成立した過程を検討し、次に、1940 年代からのメキシコ建築の変容を見るものとする。



## 組織犯罪の人類学——親族から読む解くメキシコ麻薬カルテル

山本昭代

### I. メキシコにおける組織犯罪

カルデロン前大統領が 2006 年に始めた「対麻薬組織戦争」をきっかけとして、今日メキシコは、メキシコ革命以来ともいわれる悲惨な暴力が全土に拡大している。昨年 9 月に起きたゲレロ州での 43 人の学生拉致失踪事件で、首謀者の市長夫妻と地元犯罪組織の関係が取りざたされたが、組織犯罪においても親族関係は大きな意味をもつ。メキシコの社会組織研究では、企業や政治などにおいても親族としての関係が重要な意味を持つことが指摘される。ここでは、組織犯罪の世界において親族やジェンダーがどのような意味をもつのかに焦点を当てる。取り上げるのはおもに、メキシコの麻薬生産と密輸で歴史のあるシナロア・カルテルと、犯罪事業の多角化と革新的な試みで知られるロス・セタスである。

### II. シナロアの華麗なる一族

シナロア山中の麻薬栽培地などでは周囲はみなナルコで、殺し屋が尊敬され、ナルコであることにスティグマはない。例えば昨年逮捕された「チャポ」ことホアキン・グスマンは 2007 年、53 歳にして 18 歳の「コーヒーとグアバの女王」エマ・コロネルと盛大な結婚式を挙げた。彼女は大物マフィア、イグナシオ・コロネルの姪である。ミスコン女王の妻は世界最大のマフィアにふさわしい「トロフィー」であり、同時に政略結婚の意味もあった。

### III. 末端を担う女性と少年

一方、安く使い捨てにされる犯罪世界の末端には、多くの少年や女性がいる。そこでも家族や親族がそこに入り込むきっかけをつくる。とくに女性がナルコにかかわるケースの大部分は男性の家族メンバーが関係する。父親や夫などの手伝いをしたり、夫が逮捕されたり死んだりした後、生活のために仕事を引き継ぐなどのケースが多い。女性にとっては、ほかの仕事よりずっと多くの収入が得られるが、ナルコ世界のヒエラルキーの中では最下層の小売りや運び屋というリスクが高い割に低収入な仕事についていることが多い。

### IV. 企業体としてのカルテル

ロス・セタスの場合、軍の組織をアレンジしたヒエラルキーと役割分担を構成する。ヒエラルキーは基本的に実力と経験による。組織単位は司令官とその補佐、戦闘員らからなり、行政区単位の半自律的な組織でもある。支配地区内で恐喝などさまざまな犯罪行為によって資金を集め、会計係がメンバーへの給料や公務員らへの賄賂を支払い、上納金を納める。メンバーをつなぎとめるのは恐怖感と同時にホモソーシャルな仲間意識もある。

## サンパウロ人文科学研究所所蔵の楡木久一資料に関する調査報告

長尾直洋(東洋大学人間科学総合研究所)

1908 年の笠戸丸移民以降、第二次世界大戦の影響で移民の送出国が停止した 1941 年までに、約 19 万人もの日本人がブラジルへと渡った。出稼ぎ目的であった日本人移民の大半は、日々の生活に忙殺されており、またその子弟へは帰国を視野に入れた日本語教育が行われたため、邦人社会内でポルトガル語を解する者はごく僅かであった。こうした状況のなか、1930 年代後半の新国家体制および大戦の激化によって、子弟への日本語教育や日常での日本語会話、そして邦字新聞の発行が禁止されたことで、邦人社会では戦争に関する情報が不足し、母国の敗戦に関する情報も錯綜した。日本の敗戦を信じなかった勝ち組の一部は、日本敗戦を触れて廻る負け組の主要人物への襲撃を行い、多くの死傷者を出した。この他にも、勝ち組を標的とした詐欺事件の横行など、邦人社会の混乱は戦後暫くの間続いた。

ブラジルの邦人社会における勝ち組負け組抗争については、既に数多くの著作にて触れられ、また研究の対象となっている。本発表にて検討する資料は、勝ち組の楡木久一氏による、日記や新聞等のスクラップを中心としたものであり、関係者による口述が主であった勝ち組側の資料群における貴重な文字資料として位置付けられている。本資料の一部は 1981 年に国立国会図書館によって買い取られ、現在は同館の憲政資料室に保管されている。国会図書館へ売却されなかった残りの資料は、第三者の手を経て、2012 年以降サンパウロ人文科学研究所に所蔵されており、発表者は 2014 年 11 月、同研究所の許可を経て、未分類であった同資料の整理を行った。

本発表では、勝ち組負け組抗争に関する代表的著作・研究を概観した上で、国会図書館及びサンパウロ人文科学研究所所蔵の楡木久一資料の全体像を提示することで、勝ち組負け組抗争の資料としての、同資料の更なる活用の可能性について考察する。

## ヌエバ・エスパーニャにおけるインディオ村落共同体の変容についての俯瞰的考察

和田杏子(青山学院大学大学院)

本報告は、18 世紀メキシコのインディオ村落共同体の変容過程を地理的に広い範囲で俯瞰することを試みたものである。スペインによる統治下、参事会制度と主村・属村関係から成る一様な統治構造を移植されたインディオ社会は、植民地時代を通じて組織的な細分化を経験した。

18 世紀後半に急進化したブルボン改革が、村落共同体の細分化を推し進めたと指摘する研究者は多い。経済の活性化による現金収入の増加は、属村の自立性の向上を支えたであろうし、教会制度改革に伴う教区司祭と教区民の関係性の変化は、分村の火種となりえた。村落共同体を分離させ行政区分を小さくすることで、より効率的な徴税が可能となることが期待されたため、王室収入の増大を目指す官僚たちも分村に対して積極的になっていった。

1767 年、会計監査院は徴税の効率化のため、現ゲレロ州トラパ行政区の村落共同体の細分化を進めるよう命じたという。トラパの地方行政官も分村に対して積極的であり、1760、1770 年代の同行政区では、人口が一定数に満たずとも分離を達成することができた。トラパほど顕著でないとはいえ、メキシコ大司教管区やプエブラ地方においても 1750 年代から 1790 年代にかけて分村の傾向は高まった。

これらの地域とは相容れない特徴を示すのは、オアハカ地方である。現在 570 の市から成るオアハカ州は、1780 年代、1800 年代を除いてほぼ継続的に村落共同体の細分化が進んでいた。1696 年から 1718 年にかけて王室が進めた土地所有権の売却政策とそれに付随した村落共同体への共有地の安堵は、オアハカの村落共同体の継続的な細分化への強い追い風となったと考えられる。また、他地域と比べ首長層の没落の度合いが低く、酷い土地不足にも悩まなかったオアハカでは、属村の分離に対する主村側の抵抗や、物理的な困難が少なかったのではないかと推察される。

実際の報告では、それぞれの社会状況をより詳細に比較検討することで、各地方の細分化のリズムに見られるズレを解釈していく。

## メキシコ市における防衛と祝祭の関連性-聖イポリト祭から-

立岩礼子(京都外国語大学)

メキシコ市において 1528 年から 1812 年までアステカ帝国首都のテノチティトラン陥落した毎年 8 月 13 日に征服を祝う聖イポリト祭が開催された。この祝祭はスペイン王旗を掲げてプラサ・マヨールからイポリト教会までを往復する軍事パレードであり、スペインによるメキシコ統治をゆるぎないものであることを誇示するパフォーマンスではあったと考えられる。本発表では、18 世紀後半のブルボン改革まで正式な軍隊を保持しなかったメキシコにおいて、この祝祭が実質的な軍事教練としての場と化したことを報告する。

## チューインガムとメキシコ革命：革命政府によるチクル産業 「国有化」の試み

川上英(東京大学等非常勤講師)

サポディラの木の乳液から作られるチクル(chicle)は、チューインガムを作るためのガムベースの天然の原料として最も優れたものとされる。米国のチューインガム産業においてチクルが主原料として使われていた 1890 年代から 1940 年代の間、チクルの主産地であるユカタン半島は、世界の 90%以上のチクルを米国に供給し続け、「チクル・ブーム」に沸いた。

雨季の 7 月から 2 月にかけてのチクル・シーズンの間、労働者が少人数ごとに森にこもってチクル採集を行なうために、シーズンの初めに巨額の資本が必要であったことや、チクルの豊富な森林地帯には定住者の少なかったためにユカタン半島外から集められた労働者を主として産業が始められたことなどを背景として、ユカタン半島のチクル産業には、米国のチューインガム会社がシーズン初めに投入する巨額の資本に依存し、その会社と労働者との間に何重もの仲介業者が存在するという構造ができあがった。

ユカタン半島の中でも 80%以上の生産量を誇ったカンペチェ州とキンタナロー連邦領(現キンタナロー州)を擁するメキシコでは、1910 年にメキシコ革命が勃発し、労働者の権利の擁護、農民への土地分与などを政策として掲げた革命政府は、米国のチューインガム会社および仲介業者によって労働者が搾取されチクル産業の利益が占有されている事態を改善するために、政府主導で労働者を生産協同組合に組織して、仲介者を排して直接にチューインガム会社と取引させるよう、構造の変革を図った。

1920 年代末にキンタナローで始められ、1930 年代後半、カルデナス大統領期にカンペチェも含めてユカタン半島全体で強く推進されたチクル産業の組合システムへの転換は、キンタナローのマヤ地域やカンペチェの一部では確立されたものの、チクル産業全体を組合システムに変えることはできず、仲介者を完全に排除することもできなかった。1940 年代半ば以降、チクル以外の原料の台頭および合成ガムベースの開発にともなって米国でのチクル需要が下降を続け、ユカタン半島のチクル・ブームも終わり、革命政府の目指したチクル産業の「国有化」は実現しなかった。

## El TLCAN: un balance de dos décadas (1994-2013)

Jorge Alberto López Arévalo/ Emmanuel Arrazola Ovando

(Universidad Autónoma de Chiapas/ Universidad del Mar, Huatulco)

El Tratado de Libre Comercio de América del Norte (TLCAN), también conocido por sus siglas en inglés: NAFTA; es un acuerdo que establece un área de libre comercio entre Canadá, Estados Unidos y México. A lo largo del presente trabajo se examinarán sus orígenes, sus principales características, así como los efectos que su aplicación han tenido en el comercio exterior, la producción, la inversión, el empleo y los flujos migratorios en este proceso de integración en la economía mexicana.

EL TLCAN ha implicado cambios importantes en la reestructuración de la economía de los países que la integran, más evidente en el caso mexicano por el tamaño y el grado de industrialización de las economías.

El objetivo general del TLCAN era: Formar una Zona de Libre Comercio, estableciendo reglas claras y permanentes para el intercambio comercial, que permita el incremento de flujo comercial e inversión, así como nuevas oportunidades de empleo y mejores niveles de vida. El objetivo de este trabajo será analizar si esos objetivos se han cumplido en el caso de la economía mexicana.

En el caso de México, después de la crisis de la deuda externa de 1982, decidió profundizar las reformas estructurales del neoliberalismo para avanzar en su integración a la economía mundial y tener acceso al mercado de capitales internacionales para enfrentar los desequilibrios macroeconómicos y alcanzar condiciones de crecimiento con estabilidad de precios. Se recurrió a factores exógenos ante la inviabilidad de las políticas de ajuste para alcanzar tales objetivos, pero los resultados son de crecimiento económico mediocre.

En una primera fase tales lineamientos fueron orientados a lograr los equilibrios macroeconómicos y asegurar las transferencias de recursos a los acreedores internacionales mediante la contracción de la actividad económica y la generación del superávit de comercio exterior. Posteriormente procuraron la integración a la economía mundial y privatización y extranjerización mayores como formas de encarar los desequilibrios y asegurar la transferencia de recursos externos para el crecimiento económico. Se dejó de lado el mecanismo anterior de ajuste devaluatorio y cierta protección al comercio exterior (como permisos previos de importación y aranceles) que generaban superávit de comercio exterior para cubrir el pago del servicio de la deuda externa, y se privilegió a éste por medio del superávit de la cuenta de capitales, logrado mediante la promoción de la entrada de éstos la venta de las grandes empresas públicas, aumentos de las tasas de interés, promover el mercado interno y flexibilizar las legislaciones respecto a la inversión extranjera (Huerta 1992). El TLCAN fue resultado natural de estas políticas.

Se buscará analizar los efectos que el TLCAN ha tenido en las entidades federativas de México, ya que su forma de integración ha sido diferenciado y el impacto por lo consiguiente.

## Modelo de desarrollo y los retos de las reformas estructurales en México. Caso del sector agrario

Francisco García Fernández(Universidad Autónoma de Tamaulipas)

En los últimos dos sexenios (2000-2012) la economía mexicana ha crecido por debajo de la media de los países de la OCDE y de las economías emergentes más relevantes (BRICS). En el Gobierno de Fox, el crecimiento promedio anual fue de 2.03% y en el de F. Calderón de 2.04%. Hay un reconocimiento general, tanto de la academia como en los partidos políticos que la economía mexicana necesita reformas estructurales que permitan crecer a tasas mayores, que aporten competitividad y reducción de las desigualdades sociales. El propósito del trabajo es demostrar, que las trabas en el crecimiento económico y la incapacidad para reducir la pobreza residen en la esencia misma del modelo económico implementado, el cual hace énfasis en la liberalización de los mercados y en la estabilidad macroeconómica, por encima de las necesidades del desarrollo económico. Algunos autores recientemente, han estudiado integralmente el agotamiento del modelo de crecimiento mexicano, las causas y características, a partir de la crisis de 2008 (Huerta, 2009). Nuestro trabajo se enfoca especialmente en las distorsiones del sector productivo, en particular, el sector agrario, y en la incapacidad de las políticas económicas actuales para promover un cambio estructural y de crecimiento económico con acento en la disminución de la pobreza y las desigualdades.

## パラグアイにおけるグアラニー文化と表象

藤掛洋子(横浜国立大学大学院)

南米パラグアイの人口は 669 万人 (2012 年世銀) であり、その内先住民族はわずか 1% と言われている。一方、三国同盟戦争で人口が激減し、DNA 上グアラニー人はいないという研究もある。このようなパラグアイにおいて先住民族を表象するのはグアラニーである。1995 年にグアラニー語が公用語となり、グアラニー語の放送局も人気を博している。街中にはグアラニー語の看板などもあり、植民地時代にスペイン人により持ち込まれた伝統工芸品であるニャンドティと先住民族文化が融合し、現代のパラグアイ文化を生み出している。ニャンドティの模様には、鳥や木の実などのモチーフが使われ、先住民族の知恵が引き継がれていると考えられる。

2011 年、パラグアイ政府は言語法令を発令し、グアラニー語を一般化させるために言語学庁 (Secretaria de la Linguistica) を発足させた。制度化が始まったといえよう。2014 年には、政府機関の名前やロゴなどにもグアラニー語を使用するようになった。法廷では裁判官がグアラニー語で証言などを聞き取り、判決文などもグアラニー語で発行されるような取り組みも始まった。2015 年 2 月には大学におけるグアラニー語の習得が義務付けられ、医学部や法学部のようにグアラニー語話者と接触が多いと想定される職業につく学生が少なくとも相手が言っていることが分かるレベルの言語能力を持つ必要があると判断され、カリキュラムの変更が行われた。

本報告では、1) グアラニー文化やグアラニー語がパラグアイ社会でどのように表象されているのか、2) グアラニー語の放送局がパラグアイ社会でどのような役割を持つのか、3) 2011 年に発令された言語法令がパラグアイ社会にどのような影響をもたらしているのか、その経緯と背景について報告することを通し、パラグアイ社会の特異性や先住民族文化の資源化の主体が先住民族自身であるのか、国家であるのか、検討することを目的とする。

本報告に関する調査は、1993 年以降断続的に行っているフィールド調査ならびに 2014 年 9 月<sup>1</sup>・2015 年 3 月のフィールド調査結果による。

---

1 本研究の一部は、日本学術振興会科研費 (課題番号 26101002) の助成を受けて行われた。



## Shall we タンゴ?

### ー現代ブエノスアイレスのミロンガにおける生の演戯性

武田優子(早稲田大学)

本報告の目的は、現代ブエノスアイレスにおいて、一般の人々がタンゴを踊り楽しむミロンガという場と、そこに生起する社会関係の具体的生成局面を、その演戯性に着目しながら明らかにすることにある。それは、いわゆる国民文化や世界遺産といった、西洋近代的な芸術文化認識ではとらえきれない、生の経験的側面についての考察にもつながっていくだろう。

一般的なタンゴのイメージは、男女ペアのプロダンサーが大規模な舞台やタンゲリーアにおいて、アクロバティックな型を駆使しながら、ステレオタイプの情熱、官能、誘惑に彩られた異性愛のドラマを演じるというものである。舞台芸術やショーとして作品化されたステージタンゴは、アルゼンチン性を示す記号として、強烈な身体イメージを視覚的に焼き付けながら、哀愁に満ちた独特の音楽の調べとともに、グローバルに流通し消費されている。

だが、現代ブエノスアイレスには、演者と観客といった固定的な枠組みを離れ、ミロンガと呼ばれる場をめぐり日々生成されているタンゴシーンがある。ミロンガは腰を下ろしてタンゴを鑑賞する場ではない。一般の老若男女が、これはと思う相手と組み、踊り、即興の美に命を燃焼させる場である。階級、国籍、人種、年齢等に関係なく、タンゴを愛し踊るすべての人々に開かれている。

ミロンガにはそこに通う人々の間で共有されている暗黙のコードがある。それは但し書きがあるわけでも学校で教えられるわけでもない。ミロンガに通いながら肌で感じ体得していく以外に方法がない。その代表的なものに、アイコンタクトによるダンスパートナー選びの方法・プロセスがある。

潜在的パートナー選びはダンスの時間を含め常時進行しており、ミロンガは視線の電波が張り巡らされた場だと言える。そこで人々は自己の身体を他者の視線に曝すと同時に、他者の曝された身体を眺め、誰かのまなざしとふれ合う瞬間を待っている。人々はもはやミロンガ内で繰り広げられるやりとりを傍観する観客ではいられない。観客なしで自らのダンスにただ没頭することもできない。ミロンガの演戯的空間において、人々は観ると同時に観られ、演者であると同時に観客でもあるような時空間を生きているのである。

## 現代キューバにおけるクラシック音楽の社会的布置をめぐって

田中理恵子(東京大学大学院)

本発表では、ハバナの人々に見られる芸術的な経験の変化を例に、キューバの今日的な社会変容の一端について、人類学的な考察を行うことを目的とする。具体的には、キューバの芸術のなかでも、西欧伝来のいわゆるクラシック音楽に焦点を当て、それがいかに実践されているのかを報告する。

キューバのクラシック音楽は、西欧中心主義的な音楽観からすれば、未だ周縁的な存在のように捉えられるかもしれない。しかし音楽史的な観点からしても、重要な歴史過程を持ち合わせていることが窺える。例として、1930~40年代にはH. v. カラヤンをはじめとする有力な音楽家との交流が行われていたこと、キューバ国立管弦楽団は今日まで約100年に渡って活動してきたことなどが挙げられるだろう。

そもそもキューバのクラシック音楽は、スペイン系、アフリカ系の強固な伝統を持つことに加え、北アメリカの音楽形式や旧共産圏の音楽技術なども取り込みつつ、その音楽を成立させてきたことは興味深い。こうした経緯と相俟ってか、近年ではE. レクオーナなどの代表的な作曲家たちが再び注目を集め、その存在を示している。

ただしここでより注目すべきは、今日のクラシック音楽の実践に垣間見られる社会変容の動態にある。ハバナの実践を例にとれば、クラシック音楽の実践や音楽家は社会的に優遇される傾向にあることから、人びとにとってクラシック音楽を身に着けることは、厳しい経済状況のなかで生計を立てる、知性や教養を身に着ける、つまり生きる手段として有効に機能する。こうした背景から、「音楽家になりたい」といった音楽に対する積極的な社会的言説が生じていることが見て取れる。

一方、音楽を専攻する学生たちは、手厚い教育制度の下で学ぶものの、卒業と同時に厳しい社会状況に直面し、そのギャップに失望する。音楽活動を続けるには、「カネがない」「モノがない」という社会的言説がとりまくなかで、モノやカネ（あるいは代用物）を生み出し、演奏や作品を創造していかざるを得ない。こうしたプロセスにおいて、キューバのクラシック音楽特有のダイナミズムもまた生じていると考えられる。

さらに音楽家たちの実践は、キューバ民衆の日常とも深く関わっており、音楽家の創造ないし環境が民衆の物質的欲求を喚起するような様相も垣間見られる。

こうした民族誌的な例に基づき、今日のキューバにおけるクラシック音楽の布置をめぐって、キューバの社会変容の一端について考察を進める。



# パネル A～E

掲載順

分科会 1～9

パネル A～E

記念講演

シンポジウム

## 現代メソアメリカ社会における古代遺跡の保存と活用—文化資源の管理をめぐる学際的パースペクティブ

代表者 小林 貴徳 (関西外国語大学)

### 〔報告要旨〕

遺跡は人の手が加えられなければ廃墟に過ぎない。なかば土に埋もれた「廃墟」は専門家による掘り起こしを受ける必要がある。考古学者ら高度に専門化された集団(学)によって、廃墟は学術的資源として意味づけされた「遺跡」となる。遺跡のなかには、人類の遺産としての価値が認められるものもあり、国や政府(官)によって国家的資源としての「遺産」となる。その過程では、遺産を保護しつつ多くの人が観察できるようにと遺跡の公園整備が進められることが多い。遺跡の公園整備化は政府主導であるものの、観光業界(産)の資本投下によって、遺跡ツーリズムの舞台となる。遺跡の観光資源化は、遺跡が位置する地域社会に対して、観光関連産業の裾野を広げるだけでなく、住人のあいだの歴史観やアイデンティティに影響を及ぼすことがある。遺跡の遺産化や観光開発が地域住民(民)を社会参加に導く動機付けとなり、遺跡を地域資源として活用しようとする動きもみられる。

本パネルは、メソアメリカ地域における古代遺跡がどのように資源化されているのか、その多様なプロセスについて学際的に検討するものである。遺跡の資源化に関与する産官学民、さまざまな社会的アクターは、協働や交渉、排除や軋轢などどのように関わり合い、そこではどのような相互作用が見られるのだろうか。遺跡の発掘から社会還元、遺跡を活用した地域振興や文化景観の創出にいたるまで、遺跡をめぐる実践はどのように変容してきたのか、また、どのように変容しているのか。古代遺跡の資源化をキーワードに新たな展望を見据える本パネルは、つぎの4つの研究報告によって構成される。

### 報告① 考古学者は古代遺跡をどのように資源化するか—国家的モニュメントとしてのテオティワカン—

福原 弘識 (埼玉大学教育機構)

本発表では、メキシコのテオティワカンにおける国家的モニュメントとしての遺跡の位置づけが歴史的にどのように形成されてきたかをまず整理する。次に、考古学者が置かれる多様な立場(学者・政府関係者・労働者)の違いに注目しつつ、学術的な義務だけでなく観光業や国家戦略に囲まれた環境において、考古学者たちが実践する古代遺跡の資源化のあり方について報告する。

報告② 遺跡を語り、活用し始めた人々—エルサルバドルにおけるコミュニティ考古学  
の実践例からみる古代遺跡の資源化のプロセス—  
市川 彰 (名古屋大学高等研究院)

本発表では、エルサルバドル共和国ウスルタン県ヌエバ・エスペランサ村におけるコミュニティ考古学の実践から古代遺跡の資源化のプロセスを考える。突然の遺跡発見から、そこに価値を見だし、積極的に考古学調査へ参加することで自らが遺跡を語り、遺跡を活用し始めるまでの地域住民の意識や行動の変化の過程を振り返り、既に多様な価値が付与された遺跡とは異なる古代遺跡の資源化のあり方を提示する。

報告③ 観光業界、行政、そして地元住民—ステークホルダーのそれぞれの思惑が交叉  
する世界遺産チチェン・イツァの現実—  
杓谷 茂樹 (中部大学)

本発表では、メキシコのユカタン州にある世界遺産チチェン・イツァにおいて、遺跡公園の日常の風景が、実は利益追求の強力なまなざしが重なった極度の緊張状態にあること、そして多数の観光客を連れてくるカンクンやリヴィエラ・マヤの観光業界の動向が、観光行政あるいは文化財行政によってコントロールされ得ないためにその状態が強化されているということを、チチェン・イツァのおかれている場所を考慮しながら明らかにしていきたい。

報告④ 遺跡の地域資源化と文化景観の生成—メキシコの観光開発プログラム「プエブ  
ロス・マヒコス」における地域社会の取り組み  
小林 貴徳 (関西外国語大学)

本発表では、古代遺跡の近くに位置する町、あるいは都市景観の一部に古代遺跡が組み込まれた町において、古代の遺跡や遺物が地域社会の住民の歴史観や文化的実践にどのように影響を与えているのか、また、地域住民が古代遺跡を地域の資源としてどのように活用しようとしているのかを考える。ここでは、メキシコ政府が進める認定型観光開発プログラム「プエブロス・マヒコス」について主にメキシコ中央高原部での展開に注目し、地方創生事業における古代遺跡の地域資源化の可能性と問題点を浮き彫りにする。

ディスカッサント① 本谷 裕子 (慶應義塾大学)

ディスカッサント② 鈴木 紀 (国立民族学博物館)

## Proceso de paz en Colombia: situación actual, alcance y retos pendientes

Coordinadora: Noriko HATAYA(Universidad Sofia)

Colombia ha padecido un conflicto armado por más de 60 años, caracterizado por múltiples intentos fallidos de distintos gobiernos por encontrar una solución definitiva al mismo. El proceso actual de paz de la administración de Santos tiene características diferentes de las iniciativas de gobiernos anteriores, lo cual ha permitido acercamientos sin precedentes con la guerrilla de las FARC. Ello genera expectativas cada vez mayores de que en un futuro cercano se materialice un acuerdo de paz definitivo. Sin embargo, hay muchos asuntos pendientes por resolver y así garantizar la consolidación de la paz, como “la reconstrucción y desarrollo económico de la sociedad en el posconflicto”. En este panel, los tres expertos sobre el tema de paz en Colombia se aproximan al proceso actual desde diferentes perspectivas y discuten su balance, enfocando los elementos que pueden ser obstáculos y dificultades para llevar a cabo la construcción de paz.

Primero, la presentación de Carlo NASI de la Universidad de Los Andes, se enfoca en el proceso de paz que se está dando en la Habana para comprender la situación coyuntural. La presentación inicialmente se referirá al contexto del conflicto armado colombiano, así como a algunos antecedentes de las negociaciones de paz en el país. Posteriormente, el análisis se enfocará en las actuales negociaciones de paz de La Habana, en particular lo que se refiere a: 1) las condiciones que llevaron a iniciar el proceso de paz; 2) los procedimientos y contenidos de la negociación, así como los acuerdos parciales logrados; 3) el impacto esperado de los acuerdos de paz en la democracia y la economía; y 4) las varias dificultades y retos que se han presentado en el proceso de paz, y que introducen incertidumbre sobre la culminación exitosa de las negociaciones de paz y la implementación de los acuerdos.

En segundo lugar, Hisanori FUTAMURA de la Universidad de Nagoya analiza los cambios que se han producido durante los últimos años tanto en la relación entre Colombia y los Estados Unidos, como en las políticas relacionadas con el proceso de paz. Futamura enfoca las relaciones diplomáticas y políticas de Colombia con el factor externo más importante para el país, los EE.UU., desde el inicio del Plan Colombia

hasta hoy. Observa tanto los aspectos invariables como los aspectos que se han cambiado a medida que avanzan las fases de las relaciones bilaterales para saber cuál será el efecto del proceso actual de paz para ambas partes.

Finalmente, el trabajo de Yuichi SENDAI, del Instituto Iberoamericano de la Universidad Sofia, analiza algunos asuntos pendientes al interior del país relacionados con la reconciliación nacional, la reinserción de los ex-guerrilleros, y la situación socioeconómica de las comunidades locales receptoras de los desmovilizados. Su presentación consta de tres partes: 1) analiza los cambios del marco legal para los ex combatientes desde la década de 1980 y discute los problemas que tiene el marco legal actual de justicia; 2) analiza críticamente los programas de reinserción bajo la administración del presidente Uribe; y 3) revisa los programas para la convivencia con las víctimas y detecta sus limitaciones.

De esta manera, el panel pretende analizar las características, alcances y retos pendientes del proceso de paz de Colombia hoy en día, tanto como las expectativas de la sociedad posconflicto de este país. El idioma que se utilizará en el panel será el español.



## *Viejos y nuevos enfoques en el estudio de las relaciones exteriores de América Latina*

代表者：ロメロ・イサミ（帯広畜産大学）

近年、冷戦期のラテンアメリカ外交研究が盛んになってきた。なかでも、国際政治学において「古いアプローチ」として捉えられてきた外交史料の分析が目立つ。他方、21世紀の政治現状を「新しいアプローチ」を用いて分析する研究も存在する。なかでも、大きな注目を浴びてきたのが「ソフト・パワー」である。本パネルでは、キューバ、メキシコ、日本の事例を通じて両方のアプローチの魅力について考えてみたい。

第1報告 Edgar PELÁEZ (Universidad de Waseda)

### *Análisis del Poder Blando de Japón: “Cool Japan” y la influencia de la cultura popular Japonesa en México.*

Antes del “boom” de la cultura pop japonesa de las décadas de 1980 y 1990, existía un consenso generalizado entre los académicos de que los productos culturales japoneses no eran capaces de atraer a las audiencias extranjeras debido a su “introspección”. No obstante, en la últimas décadas, estos contenidos han sido capaces de ganarse el corazón del público de todo el mundo. Esta tendencia llevó al periodista Douglas McGray a publicar su artículo “Japan's Gross of National Cool”, en el cual vincula este fenómeno con el concepto de “Poder Blando” (Soft Power) acuñado por Joseph Nye. Esta nueva idea atrajo la atención de las autoridades japonesas, lo que llevó a la incorporación de la cultura popular como una herramienta de la diplomacia, así como un incentivo para impulsar el desarrollo económico, creando así la política de “Cool Japan.” Esta presentación se centrará en analizar la presencia cultural de Japón en México en el marco de la estrategia de “Cool Japan,” para determinar la influencia que la cultura popular japonesa ha tenido sobre las audiencias mexicanas.

第2報告 Mariana Quintana (Universidad de Hitotsubashi)

### *La diáspora mexicana como herramienta de la diplomacia pública de México*

La situación de la violencia relacionada al narcotráfico y el problema de la migración ilegal han ocasionado que la imagen mexicana en el exterior sea mayoritariamente

negativa. Sin embargo, el gobierno mexicano ha empezado a hacer de su diáspora residente en Estados Unidos parte de la solución a este problema de imagen y la ha considerado como una herramienta para su diplomacia pública. Esta presentación se centrará en el análisis de las políticas de México hacia su diáspora en Estados Unidos para demostrar cómo el gobierno ha creado una estrategia de mejora de imagen del país en el exterior centrada en los migrantes.

第3報告 Isami ROMERO (Universidad Agroveterinaria de Obihiro)

*Japón y el gobierno revolucionario cubano durante la primera mitad de la década de 1960*

Después de la Revolución cubana, el gobierno japonés buscó establecer una relación estrecha con el nuevo gobierno revolucionario. Los estudios preliminares han establecido que la necesidad del azúcar fue el factor determinante para que se diera esta situación, pero los archivos desclasificados muestran que el acercamiento de Japón con la Cuba Revolucionaria fue un proceso mucho más complejo. Esta presentación se centrará en mostrar la información de algunos de los archivos desclasificados y dilucidar si el comportamiento de Japón hacia Cuba fue anómalo o bien coherente durante la primera mitad de la década de 1960.

第4報告 Hideaki KAMI (Universidad Estatal de Ohio)

*A New Look at U.S.-Cuban Relations: Migration Talks, Propaganda War, and Persistent Animosity after the Cold War*

As Barack Obama and Raúl Castro announced the opening of talks on normalization of U.S.-Cuban relations, one of the key questions that emerged was why this was not possible earlier. This paper explores this conundrum by analyzing the interrelated political dynamics between Washington, Havana, and Miami during the years from 1983 to 1985. This period is crucial for understanding why the United States started to demand Cuba's change of internal society as pivotal precondition for the improvement of U.S.-Cuban relations, as well as how the basic contour of U.S.-Cuban relations started to diverge from the one of U.S.-Soviet relations—even before the end of the Cold War. The paper focuses on the 1984 U.S.-Cuban migration agreement and the 1985 startup of Radio Martí as the two notable episodes of the early 1980s. It is the first attempt to examine U.S.-Cuban relations of this era by using the primary sources of the

United States, Cuba, and third-party countries such as Mexico and Canada. As such, it aims to shed new light on several noteworthy features of U.S.-Cuban relations that have shaped its trajectory thereafter.

## 詩の翻訳可能性と受容について—ボルヘスの「十七の俳句」をめぐって—

平成27年度日本学術振興会外国人研究者招へい事業により来日されるホセ・アミコラ教授を中心に、現代アルゼンチン文学と日本文学との交流関係について特別パネルを企画した。日本の伝統詩歌は、ヨーロッパのジャポニスムと日本人移民を通じてラテンアメリカに受容され、各国の詩人たちに様々な影響を及ぼしている。本パネル報告では、ボルヘスの「十七の俳句」(1981)に焦点を当て、異文化間の文学の受容と翻訳可能性について検討する。

第1報告 ホセ・アミコラ (ラ・プラタ国立大学)

### *Diecisiete haiku de Borges*

La presente ponencia parte de las ideas expresadas por Borges en una conferencia de 1951, en la que el autor responde de modo admirable a las encrucijadas del clima intelectual de los años 40 en la Argentina, con dos partidos en pugna: por un lado un nacionalismo literario envejecido (que pretendía cerrarse a las influencias exteriores) y, por otro, la postura borgeana que postulaba el universalismo cultural como característica de la literatura argentina. Este texto fue luego publicado en 1955 por la revista *Sur*, órgano privilegiado para reproducir el pensamiento de la facción liderada por Borges.

Según Ricardo Piglia, uno de los más lúcidos críticos de la obra borgeana (*Crítica y ficción*, 1986, p.51) la tesis principal del ensayo de Borges consistiría en que las literaturas desplazadas de las grandes corrientes europeas podrían ser irreverentes frente a las grandes tradiciones. Esto implicaría para Borges el permiso para la falsificación, el robo, la traducción como plagio, la mezcla de registros, etc. Y esta sería y no otra la particularidad esencial para una literatura como la argentina.

No es de extrañar que esta tesis borgeana se haya tornado un manifiesto literario para los escritores innovadores de la Argentina y de Latinoamérica. No hay que olvidar que la revista *Sur* propulsó a Borges a la fama internacional, así como también se hizo cargo de la batalla para destronar a los tradicionalistas literarios, que cultivaban un realismo a lo Balzac o el realismo socialista pregonado desde la URSS. Borges se había caracterizado por la búsqueda de la renovación, como lo demuestra su traducción al

castellano de las famosas páginas finales de *Ulysses* de James Joyce durante la década del 20. Sin embargo, su ímpetu vanguardista encontró luego limitaciones, pues pasó a despreciar la forma novela, empeñado en seguir atacando el realismo y las descripciones psicológicas. Asimismo, en poesía Borges seguirá practicando hasta el fin de su vida formas tradicionales como el soneto.

Un quiebre en este proceso creador de Borges puede encontrarse, sin embargo, en la década del 80, cuando nuestro autor se relaciona con su discípula más valorada, María Kodama, quien a causa de su origen japonés, llevará a nuestro autor a apreciar de modo creciente la cultura nipona. En este momento creativo puede ubicarse la aparición dentro de la obra borgeana de la forma haiku, cuyos presupuestos encajan perfectamente bien con la concepción general universalista de Borges.

Los haiku que Borges escribe en 1981 intentan así expresar un vaivén entre la idea sutil de totalidad en la sucesión de diecisiete miradas sobre el mundo, al mismo tiempo que hacen uso de un movimiento pendular entre el microcosmos y el macrocosmos. Por otra parte, si la forma haiku había desdeñado la veta amatoria, esta particularidad condecía perfectamente con la creatividad borgeana que ponía entre paréntesis las efusiones. Por ello, de los diecisiete haiku solo tres parecen un homenaje a la amada perdida.

Esta comunicación se cierra con el intento de mostrar la factibilidad de traducir poesía. Esta afirmación debe, con todo, restringirse para considerar cada caso en particular. Parecería que los principios filosóficos que se hallan en la base del haiku admitirían su traducción a otras lenguas. Por ello ofrezco como ejemplo de traducibilidad mi versión de este texto “inefable” de Borges al idioma inglés.

## 第2報告 井尻香代子 (京都産業大学)

### アルゼンチンにおける日本の詩歌の受容

アルゼンチンにおいては、西欧のジャポニズムに加えて、日系移民の活発な文化活動によって日本文学の紹介が行われた。とりわけ日本の詩歌はボルヘス、ビオイ・カサレス、コルタサル等現地の作家達に影響を与え、日系移民の直接の俳句普及の試みと連動して、今日のスペイン語俳句制作の興隆を生み出した。本報告では、こうした俳句受容のプロセスを明らかにし、アルゼンチン俳句にみられる特色を分析する。

### 第3報告 内田兆史 (明治大学)

ボルヘスの詩作品を訳す ——ボルヘス会による月例「読詩会」での取り組み

ボルヘス研究者、ラテンアメリカ文学研究者、詩人らからなるボルヘス会では、2006年より月例で「読詩会」を開催し、ボルヘスの詩作品の解釈を試みてきた。本報告では第一短篇集『ブエノスアイレスの熱情』から始め、現在『他者、自身』の終盤にたどり着いているこの会の中で、とりわけ年代順に解釈を行うことで浮かび上がってきたボルヘス作品の特徴や、翻訳にともなう問題点などについて考察する。

### 第4報告 野谷文昭 (名古屋外国語大学)

詩の変容 ——ボルヘスのハイクから日本の俳句へ

ボルヘスが俳句に関心を抱いていたことは、自ら実践した証としての、*La cifra* 所収の17 haiku に端的に示されている。ボルヘス生誕百周年の年に、この17の haiku を詩人で俳人の高橋睦郎氏が俳句という定型詩に翻訳している。そのプロセスは、日本人の俳句と外国人のハイクにおける違い、高橋氏の言葉を借りれば「俳句のアイデンティティ」を浮かび上がらせているように思われる。本報告では、前述のプロセスに焦点を当て、翻訳の可能性について考えてみたい。

以上

## イエズス会宣教を通じてのエリート現地民の誕生と社会・宗教組織の形態—アジアとラテンアメリカの比較に向けて—

### パネルの趣旨

アメリカの「発見」以来、世界に広く進出し、全人類のキリスト教化という壮大な使命に取り組んだ修道会の一つがイエズス会である。同会の会員は信心会ないし兄弟会

(*cofradía, congregación* [西語], *confraria* [葡語]) の設立をその目的達成のために重視した。中世ヨーロッパ起源の同宗教組織は、近世以来、世界各地に移入され、新たな現地民エリート層の創出が促された。

信心会に関しては、その発祥地であるヨーロッパ内部での歴史的展開が議論されてきた。しかし近年、近世以来のヨーロッパ・キリスト教化の世界的進展に伴い、ヨーロッパの外に移入された信心会組織が土着の文化や慣習と融合・反発しつつ発展していくプロセス解明の試みが始まった。また例えば、信心会構成員が織り成した血縁・姻戚とは別の紐帯に注目する人類学的な観点も、信心会研究に対して重視され始めた。

本パネルでは、近世日本とスペイン領アメリカで現地民の改宗のためにイエズス会が導入した信心会の特徴や歴史的な発展を比較検討する。具体的には、武田和久が、信心会に関する近年の研究動向を概観する。次にギジェルモ・ウィルデが、17-18世紀のイエズス会パラグアイ管区内の先住民キリスト教化のために建設された改宗施設レドゥクシオン

(*reducción*) の内部に設けられた信心会を取り上げる。これに対して川村信三とカルラ・トロヌ・ムンタネは、16世紀中葉からおよそ100年間の日本にイエズス会士が導入した信心会を扱う。

### 武田和久

信心会は12-13世紀ヨーロッパ起源の宗教組織である。この時期に宗教熱が一般信徒の間で高まりを見せ始め、階層、出身、性別、年齢よりもむしろ宗教心を媒介に人的関係が育まれ、各地に多様な名称・規模の信心会が誕生した。やがてアメリカの「発見」を経て、信心会は、「全人類のキリスト教化」を目指す宣教師を主導にヨーロッパの外に移入され、土着の文化や慣習と融合・反発しつつ発展していった。本発表では信心会に関する近年の研究動向を概観し、続く三者の発表の理解の促進に努める。

**Guillermo Wilde**

En esta presentación me interesa analizar la emergencia y desarrollo de las asociaciones religiosas conocidas como « congregaciones » dentro de los contextos misioneros de Chiquitos y guaraníes, en la Provincia jesuítica del Paraguay, íntegramente conformadas por indígenas. Mi argumento es que los congregantes no solamente actuaron como agentes de la evangelización sino también y sobre todo como vectores de la etnogénesis misional, es decir la creación de identidades misionales nuevas. Las congregaciones fueron instrumentos de construcción y conservación de una memoria social propia de la misión. Por una parte, contribuyeron a la formación de una nueva identidad misional, en un sentido territorial y religioso. Por otra, los congregantes, en tanto miembros de la elite letrada misional, fueron capaces de adquirir, conservar, reelaborar, transmitir, y administrar la memoria de los pueblos de reducción durante la presencia de los jesuitas e incluso después de su expulsión, ocurrida en 1768.

**川村信三**

16 世紀は、日本にキリスト教が導入され、いわゆる「キリシタンの世紀」を創出した時期として知られる。その際、イエズス会の主導とするカトリック教会がヨーロッパの教会ヒエラルキーを持ち込んだのは、ザビエルが宣教を開始してから 50 年後のことである。その間、日本のキリスト教は「ミッション」の位置づけにあった。そして、その信徒に教会組織を運営維持させたものとして、ヨーロッパの「兄弟会」(confraternitas)の組織作りが貢献した。兄弟会の組織は、日本では主に「慈悲の組」(ミゼリコルディア)を代表として、豊後府内や長崎で、葬儀、埋葬、病院経営などの「慈善事業」団体として活躍した。その中核となる信徒たちが、イエズス会宣教師をサポートした。こうした団体は、史料によれば 1618 年の段階で全国 75 カ所に存在していた。特に南米のミッション地と比較対象としたいのは、コンフラリヤの発想が、地域の教会共同体の役割を担っていた点である。それは後に司教が着座し、教区制度を運営する以前の代替教区の役割を果たした。ある地域では教会のリーダーとコンフラリヤのリーダーが兼任するなどその特徴を示した。本発表では、コンフラリヤと呼ばれる組織が、日本の 16 世紀宣教にいかに関与したかを跡づける。

**Carla Tronu Montané**

En la segunda mitad del siglo XVI los portugueses establecieron comercio regular entre Macao y Japón y los jesuitas establecieron misiones en varios territorios de Japón. En 1671 se fundó la ciudad de Nagasaki, que sería el puerto regular de los



portugueses hasta 1649. La población de Nagasaki era mayormente cristiana desde su fundación y llegó a ser la comunidad cristiana de referencia en el Japón moderno temprano.

Este estudio sobre el sistema católico de parroquias en Nagasaki, muy poco estudiado hasta ahora, pone la atención en la comunidad laica y destaca la importancia de su compromiso con las iglesias parroquiales y las cofradías de la ciudad. En Nagasaki convergieron párrocos de cuatro órdenes misioneras distintas (jesuitas, franciscanos, dominicos y agustinos) y sacerdotes diocesanos japoneses, y se formaron hasta once parroquias. Si bien en varios pueblos y ciudades de Japón surgieron cofradías de laicos, en Nagasaki encontramos por lo menos seis cofradías, que tuvieron un papel muy importante en tanto que sostén de las iglesias parroquiales y sus párrocos.

# 記念講演

掲載順

分科会 1～9

パネル A～E

記念講演

シンポジウム

記念講演 (要旨)

## **La historia de los pueblos indígenas de América en el marco de la historia global**

Dr. Federico Navarrete Linares

(Instituto de Investigaciones Históricas,  
Universidad Nacional Autónoma de México)

Tradicionalmente, la figura de Cristóbal Colón, el navegante europeo que llegó de manera casi milagrosa a las costas de las Antillas y de América a fines del siglo X, ha sido considerada como el símbolo de la incorporación de este continente a la historia universal. Durante mucho tiempo, este episodio fue interpretado como un “descubrimiento”, es decir, la revelación de un mundo que era desconocido anteriormente. Esta visión privilegiaba explícitamente la visión y el conocimiento europeos sobre la historia y las culturas de los pueblos indígenas americanos.

El historiador mexicano Edmundo O’Gorman adoptó una postura más extrema, aunque más rigurosa desde un punto de vista conceptual: afirmó que América no fue descubierta, sino “inventada” por los europeos, pues antes de que ellos la convirtieran en su cuarta parte del mundo (junto con África, Asia y Europa) el continente no tenía un ser histórico propio. Esta propuesta iba aún más lejos en negar cualquier autonomía histórica a los pueblos indígenas americanos antes, y después, del contacto con los europeos.

En ese sentido, ambas perspectivas coinciden en que el centro de la historia universal reside en el Viejo Mundo, específicamente en Europa, y que el papel de América en ella es necesariamente tardío y subordinado.

Los enfoques más recientes de la historia global, pese a la novedad en sus perspectivas metodológicas, parecen confirmar esta subordinación, pues dan prioridad como constructores de la historia global a los contactos intercontinentales, y a las redes e intercambios que abrieron. En este contexto, el papel de América puede ser marginalizado, lo mismo que el de otros

continentes colonizados por Europa. Por otro lado, la preocupación por encontrar las formas de “unificación” de los espacios globales y de surgimiento de culturas “mestizas” tienden a devaluar las especificidades locales y la continuidad y la viabilidad de formas diferentes de vivir y de pensar en todos los rincones del mundo.

Sin embargo, los antropólogos y los historiadores, han comprobado que aún hoy, más de 5 siglos después de la llegada de los europeos a América, los pueblos indígenas de este continente mantienen vivas sus propias formas de concebir la historia y que incluso han incorporado a Occidente, y a la historia mundial dentro de los marcos de sus propias concepciones.

Como ejemplos, examinaremos el discurso de un chamán ingano de la Amazonia colombiana, Santiago Mutumajoy y los rituales y relatos de los wixarika, o huicholes, de México, quienes han construido visiones alternativas de la historia de la relación de sus pueblos y los dominadores europeos.

Estas visiones pueden parecer anti-históricas en un primer lugar, pues no utilizan un tiempo lineal, ni establece las distinciones claves para nosotros entre actores europeos e indígenas, antiguos y modernos. Por ello han sido tradicionalmente consideradas perspectivas orales y míticas sin verdadero valor histórico, más allá de ser testimonios de la resistencia de los indígenas a la dominación europea.

Sin embargo, en la conferencia proponemos un nuevo marco de análisis, la “cosmohistoria”, que reconoce la validez epistemológica y la eficacia explicativa de la visión de Mutumajoy y de los wixarika.

Para poder hacer cosmohistoria es necesario disolver las premisas fundadoras de la historia universal y global, como la linealidad del tiempo, la unidad del espacio y la dirección única del devenir histórico. Estos cuestionamientos, cabe señalarlo, se han generalizado en el marco de la propia historia occidental en los últimos 20 años, a partir de la llamada “crisis” de la historia universal moderna.

A partir de ello, se puede comprender a la cosmohistoria como una nueva forma de interrelación entre las historicidades particulares que han existido, y aún existen, en América y el mundo. Mientras que las historias universales y globales buscaban la unidad e integración de un solo mundo histórico humano,

la cosmohistoria reconoce la irreductible pluralidad de los mundos humanos y de sus historicidades diferentes. Igualmente asume que la relación entre las diferentes historias particulares debe ser de diálogo y que incluso la hegemonía que la historia europea y universal han ejercido sobre las demás, no ha invalidado su autonomía ni su relevancia.

Finalmente, la cosmohistoria propone que cualquier visión amplia, o planetaria, de la trayectoria histórica de América deberá reconocer y potenciar esa pluralidad inextinguible y crear las herramientas conceptuales para comprenderla de manera cabal, sin unificarla bajo un solo criterio de historicidad.

# シンポジウム

掲載順

分科会 1～9

パネル A～E

記念講演

シンポジウム

## Desarrollo Inclusivo en América Latina

Coordinador: Tomomi Kozaki (Universidad Senshu)

### □ Panelistas

- ◇ Naoko Uchiyama (日本学術振興会・特別研究員/神戸大学)  
Concepto y análisis económico del desarrollo inclusivo
  
- ◇ Manuel Edgardo Lemus (Asesor, Sistema de Integración Centroamericana)  
Lineamiento del SICA sobre el desarrollo inclusivo en Centroamérica y la República Dominicana – con énfasis en la seguridad ciudadana
  
- ◇ Héctor Salazar (Gerente del Sector Social, Banco Interamericano de Desarrollo)  
Desigualdades y el desarrollo inclusivo: políticas sociales del BID
  
- ◇ Kazuo Fujishiro (Director de Centroamérica y Caribe, JICA)  
Nueva ruralidad y el desarrollo inclusivo: lineamiento de JICA
  
- ◇ César Cabello (Instituto Desarrollo, Paraguay)  
Modelo del análisis causal para el desarrollo inclusivo territorial

### □ Comentarista

Yoshiaki Hisamatsu (東洋大学)

El tema central de este simposio es hablar del desarrollo inclusivo en América Latina, como concepto, enfoque, estrategia y políticas de desarrollo, de manera multidisciplinaria, económica, política, social, cultural, histórica, territorial, entre otras. Consideramos que la AJEL es un foro ideal para discutir académicamente la temática de “exclusión/inclusión” en desarrollo en América Latina. A pesar de que muchos países de la región y varias agencias de desarrollo junto con diversas instituciones académicas utilizan el término del desarrollo inclusivo como una idea novedosa para mitigar o resolver la problemática casi endémica de América Latina, es decir desigualdades

profundas y exclusiones sociales, no hay consenso en su definición con indicadores apropiados basados en metodologías rigurosas de medición. Por ejemplo, ¿qué diferencias hay entre el desarrollo inclusivo y las estrategias de desarrollo convencionales tales como el crecimiento económico favorable a los pobres (pro-poor growth) o el desarrollo con bases amplias (broad-based development)? Cuando hablan de la inclusión en desarrollo, ¿se trata de desigualdades horizontales, verticales y generacionales, todo en conjunto? ¿Cómo se incluye la problemática más preocupante entre la mayoría de los ciudadanos de la región, o sea la inseguridad ciudadana y la corrupción en las estrategias del desarrollo inclusivo? La inseguridad ciudadana puede ser el factor más grave que frena la inversión para el desarrollo en algunos países de la región según varias encuestas serias.

La presentación de Naoko Uchiyama se enfoca en la parte teórica del desarrollo inclusivo, su concepto e indicadores. Manuel Edgardo Lemus se trata del tema más preocupante en los países de Centro América y República Dominicana, la inseguridad ciudadana. Existen varias iniciativas de desarrollo a nivel regional para enfrentar con esta problemática. Como asesor del SICA analizará los resultados y retos de estas iniciativas. Héctor Salazar analiza las desigualdades sociales en América Latina y explicará el abordaje y políticas del BID hacia el desarrollo inclusivo. La intervención de Kazuo Fujishiro se enfoca en las experiencias y lecciones aprendidas de las políticas de la cooperación japonesa en el desarrollo rural inclusivo. Finalmente, César Cabello del Instituto Desarrollo hablará de un modelo del análisis causal para profundizar el concepto del desarrollo inclusivo territorial hasta las dimensiones institucionales. Como comentarista Yoshiaki Hisamatsu hará intervenciones para profundizar y agilizar las discusiones entre los ponentes y los participantes del simposio.

El idioma que se utilizará en el simposio será el español.

\*シンポジウムはスペイン語で行われます（通訳なし）。



